

I I - B 【テーバイを攻める七人の将軍】 (Septem Contra Thebas)

--- 傲慢不遜と敬虔、真の勇氣 ---

解題

テーバイは、ゼウスによってさらわれたフェニキアの王女エウローペーを探し求めてやって来た弟の王子カドモスによって建設された。その都は、七つの城門を持つ堅固な城壁によって守られていることで名高い。

カドモスの子孫のオイディプスは「父を殺し、母と結婚する」というデルポイの神託を恐れた父親のラーイオスによって赤子のときに山中に棄てられたが、結局はその神託を実現する結果になった。酷い運命に絶望したオイディプスは両眼を突いて自ら盲目になり、娘に手を引かれて放浪の旅に出るという物語がソポクレスの『オイディプス王』の筋書きである。しかしアイスキュロスは、オイディプスの二人の息子エテオクレースとポリュネイケースが事件を恥じて父親を奥部屋に閉じ込めて隠したために、憤激した父王が二人の息子を王位を巡って争い合うように呪ったという別伝を採用する。

その後王位を交互に譲り合う約束で権力を握ったエテオクレースは、期限が来ても弟に王座を渡さずに彼を追放に処した。弟は近隣のアルゴスに逃れてその国の王アドラストスの婿になり、大軍を率いて祖国を攻撃する。その軍勢を率いるポリュネイケースを含む七人の将軍は、それぞれテーバイの名高い城門を攻略しようと向かうが、それに対抗して守備側の王エテオクレースは選りすぐりの勇士を各城門に配備する。

以下はその攻防戦を扱った『テーバイを攻める七人の将軍』(Septem Contra Thebas)の研究である。

まえがき

アイスキュロスの *Septem Contra Thebas* (以下 *Septem* と略す) は前 467 年に *Laios*, *Oidipus* に続く三部作の第三部として上演され、彼に優勝をもたらした。サテュロス劇は *Sphinx* であり、これらはテーバイのカドモスの一族にまつわる呪いをテーマとした悲劇であって、同じテーマを扱ったソポクレスの『オイディプス王』の上演に先立つこと約 50 年、アイスキュロスの晩年の作品である。

Septem は現存のソポクレスの劇『オイディプス王』、『コロノスのオイディプス』と『アンティゴネー』との間に位置する内容を持ち、ラーイオス、オイディプスに続くテーバイ王家の次の世代、エテオクレスとポリュネイケースの二人の兄弟の間の王位をめぐる争いと、その結果である相討による死の悲劇を扱っている。

Septem はギリシア悲劇の特徴の一つ⁽¹⁾としてこのテーバイ王家の三代にわたる呪いを時間の流れの中の縦軸の上に置き、横軸にはテーバイとアルゴスという二つの町とその王家の間の戦いを置いている。この二つの町を戦わせる原因となったのが、テーバイの国の王位をめぐる争うオイディプスの二人の息子であり、この争いは盲いた父王の呪いによるものとされている。

この時間と空間の縦横の軸が交差する地点が七つの城門を持つテーバイの第七の城門である、エテオクレスに追放されたポリュネイケースを助けるアルゴス王アドラストスに率いられた敵軍は城下に迫り、七人の選りすぐった将軍をこのそれぞれの城門の攻撃に向わせる⁽²⁾。そしてこの第七の城門にはテーバイの正当な王権を主張するポリュネイケースが立向い、その兄弟エテオクレスもまた守備軍の総帥としてこの第七の城門で彼を迎え討つ。

父王オイディプスの呪いが成就し、ラーイオスから三代にわたって続いたカドモスの一族の悲劇が一応の終結を見るのが、このテーバイの第七の城門であり、正にこの一点において時空の両軸が激しく切り結んでいる。そしてこの第七の城門において血を分けた兄弟が、果し合い殺し合わねばならぬという必然性が「オイディプスの呪い」であり、劇の中心はこの呪いの成就の地点に、二人の兄弟が抗い難い力とそれぞれの意志によって引き寄せられていく緊張の場面にある。そして詩人は、この緊張を次第に高めていく手法と

して、直接に第七の城門に視点を合せずに、使者の報告とエテオクレースの応答とコロスの歌という組合せによってバランスを保ちながら⁽³⁾、第一の城門から第七の城門まで円環状にテーバイの町を一巡して描写を進めていく。そしてこの円環の閉じる一点に第七の城門が位置し、兄弟の死によって悲劇の連環も断たれるのである。

以下ではこの劇的緊張の場テーバイの七つの城門を描写する第二エピソードを取り上げ、その用語の分析と手法の追求を行ってみよう。引用文は全て筆者の責任である。

本文

第二エピソードにおいては、テーバイの七つの城門を攻撃する敵将の外見とその不遜な言動を使者が逐一報告し、それに対してエテオクレースが敵将の言動を非難しながら味方の勇士を配備する。このそれぞれの対話においては敵がいかに傲慢不遜であるか、また味方がいかに勇敢でありながら謙遜であるかが強調されている。そして敵は神々の怒りに触れて破滅し、味方にはその美德の故に神助が与えられるだろうという願いが述べられ、このそれぞれの対話をコロスが歌い踊りながら敵の非運と味方の幸運を祈って締め括るという構成を取っている⁽⁴⁾。

この「傲慢な敵」と「義なる味方」という正邪の対比は、七つの城門の中で第一から第五の城門をめぐる将士の組合せまではその対照を明らかに保って繰り返されるが、この均衡は第六の城門に至って破られる。それは第六の城門には、攻囲軍の中で唯一人「義なき戦い」に反対しながら奸計により参戦を余儀なくされた正義の士、予言者アムピアラーオスが向うからだ、ここで「正義の人も不義の者と行動を共にすれば滅びる」という思想が示される。

そして最後に第七の城門にポリュネイケースが攻撃に向うことが報告されると、エテオクレースは王位継承の正当な権利を主張する兄弟に対する憎悪に燃え立ち、コロスの忠告を振り切って自身でこの戦いの主謀者である肉親を迎え討とうとする。ここに至ってはもはや祖国を死守しようという意志よりも、兄弟に対する憎悪の念が強く前面に表われて、兄弟が相討に終って父王オイディプースの呪いを成就する結果になっても構わないから、直接自分の手でこの仇敵を討ち取ろうという熱狂が彼の心を支配している⁽⁵⁾。このラーイオスの一族の悲劇を完成しようとする神々の意志を、その手に弄ばれる登場人物が自ら進んで破滅に赴きながら次第に成就していく様が⁽⁶⁾、七つの城門をめぐる攻防を一つずつ語っていく過程で表わされ、クライマックスへと筋を盛り上げていく。その各々の場面

を追いながら思想を分析してみよう。

・第一の城門

第一の城門プロイティデス門に向うのはオイネウスの子チューデウスであり、彼は「蛇」のように猛り狂って、無益な戦いを好まぬ賢いアムピアラーオスを責め、彼が臆病 *apsychia* の故に怯んでいるとなじる。彼の傲慢な心はその手にする楯に散りばめた星と月の装飾に表われていると使者は言う。彼の「傲慢な紋章」 *hyperphron sema* (387)「高慢な武具」 *hyperkompos sage* (391)ということばが、彼の慢心とその報いである破滅を予告している。エテオクレスはそれに答えて、武具の紋章などから傷を受けることは無いからそれを恐れぬと言ひ、むしろその楯に表わされている夜空がその持主の運命を予示することになるだろうという。すなわち彼の目に夜の闇が降りることになれば、それは彼の「高慢な紋章」 *hyperkompon sema* (404)が、彼の「傲慢」 *hybris* (406) の予言を自分の上に与えたことになるからというのである。

エテオクレスはこのチューデウスに対して慎重な *kednos* アスタコスの子メラニッポスをその城門を守るために配備しようとする。彼は「廉恥の女神」⁽⁷⁾ *Aischyne* (409) の座を敬い、[高慢なことば] *hyperphron logos* (410) を嫌い、恥ずべき行いは避け、善を好む人物である。戦局は軍神アレースが骰子で決めるが、生みの母である土地から敵の槍を防ぐために彼をつかわすのは、彼と血のつながる「正義の女神」*Dike* なのである⁽⁸⁾。

コロスはこの対話を受けて、国土のために戦おうと正しくも *hos dikaios* 立ち上る彼の上に神々が武運を授けるようにと祈る。(375-421)

ここに述べられている考えは、敵は高慢で愚かであり、味方は慎ましく恥をわきまえ、敵には傲慢 *hybris* の報いとして破滅が予想されるのに反して、味方には正義の女神を始めとする神々の支援が当然に期待できるという主張である。この主張は味方と正義の女神が「血がつながっている」*homaimon* (415) という表現にもうかがわれるが、これは反対の側からのヒュブリスになる恐れも示していると言えよう。ここで注目すべきは悲劇によく用いられる *hybris* ということばよりも *kompos* ということばとその複合語が、「傲慢」を表わすのに好んで用いられているということである。これについては後に論じよう。

・第二の城門

第二の城門エーレクトライ門にはヒッポノオスの子カパネウスが向う。彼はチューデウスをしのぐ巨人であり⁽⁹⁾、彼の「大言壮語」 *kompos* は「人間の分を超えた心根」(425)を示している。そして彼は「神が望もうが望むまいが」(427-428)この都を劫掠して、ゼウ

スの雷電といえどもそれを防ぐことはできないだろうと不敬な脅しのことばを吐く。彼の楯の紋章は「町を焼かん」と言っている松明を持った裸の男の像である。このように「大言壮語する」 *kompazein* 男に誰を差し向けたら良いのか？

この報告に対してエテオクレスは答える。「これはまた大言壮語におまけのついたことばだ⁽¹⁰⁾。舌はまことに人間にとって虚しい増長 *phronema* の真の告発者だ。カパネウスは攻撃の準備をして大口をたたき *apeilein*、神々を軽んじている *atizein*。虚しい喜びにへらず口をたたき⁽¹¹⁾、死すべき身でありながら大言壮語 *gegona epe* の波を天に向かってゼウスに対して送っている」(437-443)。このような男は当然太陽の熱も較べものにならぬ雷が打つだろう。この男に対してはいかに大口をたたく者であっても、燃えさかる元気に溢れたポリュポンテースが頼りになる守り手として配備されている。守護の女神アルテミスの恵みと他の神々と共に。

クロスはこれに続いて、この町に対して高言を弄する *megara eperuchesthai* 者は滅びるように、また雷が彼を打つように祈る。彼が家の中に跳びこんで来て、高慢な槍で *hyperkopoi dori* 自分を乙女の部屋から追い出す前にと(452-456)。

ここでも敵の「大言壮語」*kompos* が、*gegona epe*, *megara epeuchesthai* などと表現を変えながら、それが神々に対する不敬な念から生じた傲慢 *phronema* によるものであり、結局はゼウスの怒りに打たれて滅ぶべきことが強調されている。

・第三の城門

第三の城門ネイスタイ門に対してはイーピスの子エテオクロスが攻撃する。彼の傲慢に關しての直接の描写はないが、彼の乗馬と楯の描写によってそれは間接に表現されている。まず彼の乗馬の猛々しい有様については「鼻綱は傲り高ぶった鼻孔から出る鼻息によって⁽¹²⁾ *mykterokompos pneumasin* 吹かれて異国風の音を立てている」⁽¹³⁾(463-464)と報告される。また楯の紋様も不遜な図柄 *ou smikron tropon* であり、保壘へと梯子をよじ登る武装兵が「アレスといえども自分を城壁から投げ落すことはできない」と叫んでいる様が描かれている。

エテオクレスはこれに答えて、自分の手の中に自慢するもの⁽¹⁴⁾ *kompos* を持っている男クレオーンの子メガレウスを幸運と共に遣わそうという。彼は死して生地に養育の恩を返すか、あるいは二人の男(楯に描かれた男とそれを持つ男)を捕えて父の家を戦利品で飾るかのいずれかである。エテオクレスはこう言って次の男の大言壮語を告げよ *kompaze* という(472-480)。

コロスは味方には幸運を敵には非運を祈り、この町に対して狂った心で高慢な hyperauchos ことばを發する者を、裁き主 nemetor であるゼウスが怒りをもって見るように祈る(481-485)。

ここでは馬と楯とがその持主の傲慢な心を間接に表現し、神に対して挑戦するような思い上がりがゼウスの報いを受けるだろうことが示される。それに対抗する味方は口にはではなく手の中に壮語するもの kompos を持っている点で対照的である。

・第四の城門

第四の城門オンカ・アテーナーの門に向うのはアリストマコスの子ヒッポメドーンである。彼は身体も形も大きくその巨大な円形の楯を振り回す様を見て人は戦慄を禁じ得ない。彼の楯の紋様は口から黒煙を吐くテューポーンであり、蛇がとぐろをまいて虚ろな円楯のまわりからみついている。彼自身はアレースに憑かれて entheos まるでバッコスの信女のように恐ろしい形相で闘争を求めて荒れ狂い、戦いの雄叫びを挙げている。このような男には用心が必要だが、それは既に「恐怖」Phobos が城門に向って大言壮語している kompazesthai からである。

エテオクレスはそれに答える。「この町に近く城門の傍に座すオンカ・パラスがこの男の傲慢 hybris を憎み、恐ろしい蛇のように雛鳥から防いでくれるだろう。この男に対してオイノプスの子ヒュペルピオスを選んだが、彼はこの難局に運をかけており、姿も形も武器の様子も非の打ち所がなく、ヘルメースは理にかなった組み合わせをしたものだ。というのは立向う相手は敵同士であり、またその二人はそれぞれ楯の上の敵同士の神々を立向わせるからだ」(501-511)。そして彼はゼウスが怪物テューポーンを退治したように、ヒュペルピオスの楯に描かれたゼウスがその敵を倒すだろうと予言する。コロスもこれに和して、ゼウスの敵を楯の上に持つ者にはそれと同様の運命に遭うだろうと述べる。

戦士たちが戦場において敵に対して威嚇のことばを投げつけ自巳の勇猛を誇ることは自然なことでホメロスにもいくらか例が見られることであるが、それには死すべき人間の分をわきまえるという制限がある⁽¹⁵⁾。神々の中でもとりわけ主権者ゼウスに対して己れを誇示しその仇敵テューポーンを楯に飾ることは、公然たるゼウスに対する挑戦であり、ヒュブリスの極みである。こうしてこの敵もゼウスの怒りによって滅ぶべきことが示される。

・第五の城門

第五の城門、アムピーオーンの墓と向い合う北門には、アタランテーの子パルテノパイ

オスが向った。彼は手にする槍を「神よりも、また自分の眼にもまして頼みにして崇める」⁽¹⁶⁾ (529-530)と誓い、またカドモスの都テーバイを「ゼウスの意に背いて」 *biai Dios* 掠奪するという。彼はまだ大人になったばかりの若者でひげも生え揃っていないが、「乙女」パルテノスという名にも似合わず心は荒々しく、恐ろしい眼付をして立っている。彼もまた城門の前に立ちただかって誇らずには *akompastos* いない。それは彼がその身の円型の守りである青銅製の楯に鋳で巧みに留めた、輝く浮彫像の生身をくろうスピックスを揮っているからであり、このスピックスは一人のカドモス人をその下に踏まえて、できるだけこの男に飛道具が当たるようにしている。このようにアルゴスの土地で養われた恩に報いようとして、この居留民はこの城壁を威嚇している。神がそれを成就し給わぬように。

このような願いに答えてエテオクレスは言う。彼らをもくろんでいることが彼らの不敬な大言壮語 *anosia kompasmata* (551)と共に、彼ら自身の上に来るように神々がなし給うだろう。そして彼らは全く破滅して全く惨めに滅びるであろう。このアルカディア人に対しては、大言壮語せぬ男 *aner akompos*、その手がその業を見わきまえている男アクトールが控えている。彼は実行を伴わないことばが城門の中に流れ入って禍いを醸成することも、楯の上に嫌わしい有害な怪物の像を持つ敵が入って来ることも許さない。その怪物は城下で激しく叩かれて、自分を外から中へと連れていこうとする者を責めるだろう。

コロスはこれに対して「不敬な者たち *anosioi* の大言壮語する *megala megal-egorein* のを聞いていると、このことばは胸に迫り髪の毛は逆立つ」(563-566)と言い、神々が彼らをおの地で滅すようにと祈る。

ここでは大言壮語することが傲慢であるばかりでなく不敬 *anosios* でもあることが強調されている。パルテノパイオスの武勇も自分の力のみを頼みにして神々の助けを求めず、逆に神の意に反することも敢えてなすならば滅びにつながるばかりである。味方のアクトールとはその点で対照的である。

ここまで第一の城門から第五の城門までは、アルゴス側の猛将達がそれぞれきらびやかな武具に身を装い、籠城するテーバイ側の将兵を威嚇するために脅しのことばを投げつけるのであるが、彼らの武勇の自負は死すべき人間の分を越えて神々とその力を競い、そのために神々の怒りを招いて滅びに至ることが予想される。この思い上った性情は *kompos* という語とその派生語で示され、このことばは単なる「大言壮語」から「慢心、傲慢」という意味にまで至る内容を持っている。そしてこの慢心は視覚的には彼らの手にする楯の紋様に良く示され、詩人は使者のことばを借りて念入りにその形状を描写している⁽¹⁷⁾。

ところがこの一連の叙述が、正義の人アムピアラーオスの登場によってその流れを変えるのである。

・第六の城門

第六の城門ホモロイデス門には、オイクレースの子アムピアラーオスが向う。攻撃軍の将士の中で彼のみが正義の人として描かれている理由は、彼だけがこの名分に欠ける遠征に反対したにもかかわらず奸計によって参加させられ、しかも彼は予言者としての能力によってこれに参加した自分が滅ぶべき運命にあることを予知しているからである。使者は彼を「知恵に富み、武勇に秀でた予言者」(568-569)と紹介して、彼がこの遠征の主謀者テューデウスとポリュネイケースを罵り非難していることを伝える。彼はテューデウスを「殺人者、都市の騒乱者、アルゴスの最大の悪の教師、エリーニウスを呼び出す者、死の召使、アドラストスにこの禍いを勧める者」(572-575)と口を極めて罵る。

またポリュネイケースに対しては、彼の名の「多くの」(poly-)「争い」(neikos)の後の部分を二度繰り返して呼び、彼がこの戦争の原因であることをほのめかし、そして次のように言う。「まことにこのような所業が神々にとって喜ばしいものだろうか、後世の人々の耳に快いことだろうか、外国の軍を投入して父祖の国と土地の神々を滅ぼすことが？ 母の泉を干上らせて何の正義だろうか？ 汝の野心のため槍によって征服された祖国がどうして汝の味方となるだろうか」(580-586)。こう言って彼は自分がこの地で予言者としての名誉を全うして果てることを語る。彼の楯の上にはこれまでの將軍とは異り何の虚飾もなく、これを説明して使者は「彼が優れていると見えることよりも、そうあることを望んでいるからだ」という。そして「神々を敬う者は恐るべきだ」(596)と言って結ぶ。

これに答えてエテオクレースは言う。「あゝ災いなるかな、不敬な者たちと正しい者 dikaios とを交わせるこの前兆は！ すべてのことの中で悪しき交りよりも悪いものはない、何の収穫も得ることができないのだ。迷妄 ate の焔は死をもたらす。それは敬虔な人が悪事に逸っている船乗りたちと共に船に乗り込むと、神々に憎まれる者たちと共に滅びるからであり、また正しい人でも dikaios on 他国人を憎み神々を顧みない国民と共に同じ網に無法にもかかって、一からげに神の筈によって打たれ屈服させられる」(597-608)。

このようにアムピアラーオスは賢く sophron 正しく dikaios、勇敢で agathos 敬虔な eusebes 有徳で偉大な予言者でありながち、不敬な anosios、尊大な口を利く thrasystemos、引返すには遠すぎる遠征を目指す者どもと心ならずも行動を共にしたために、ゼウスの意志によって破滅の運命をも共にするであろうということが、船の比喻⁽¹⁸⁾によって語られ

る。ここではアムピラーオスの古典的な美德が、その仲間の悪徳と対比されているがその中で「尊大な傲慢な口を利く」*thrasystemos* ことが悪徳とされていることが *kompos* との関りで注目される。

エテオクレスはこのような正義の人に対して、同じような美德を備えたラーステネースを送る。彼は「沈黙しているかまたは時宜にかなったこと *ta dikaia* を言う事を常とし」(619)、「心は老成し、肉体は若々しい」(622)勇士である。コロスも自分たちの正しい *dikaios* 祈りを神々が聴き、町が栄え、敵がゼウスの雷によって滅びるように祈る。

・第七の城門

第七の城門にはエテオクレスの兄弟ポリュネイケースが攻撃に向う。ポリュネイケースの場合は、彼には彼なりにテーバイの王権を主張する理由があるので、使者は彼の主張をことばのままに伝えているが、これまでの場合と異り彼の性格を貶めたり、彼の言動を非難することばがここに見られない点が重要である。

彼は次のようなことをこの町に対して呪い祈っていると使者は伝える。彼は城壁を踏みしめてこの地に勝利者と宣告され、勝利の関の声を挙げてエテオクレスと闘い、彼を殺してその傍で討死するのだと、或いはエテオクレスが活着しているならば、自分を辱しめ追放した者を同じ仕方で追放し報復するのだと言う。彼はこう言って父祖の地の一族の神々を呼んで自分の祈りの見守り手となるよう叫んだという。そして彼の持つ新しい円楯には二重の紋章が巧みにつけられている。「黄金造りの武装していると見える男を、一人の女性が慎しやかに導いていく。彼女は正義の女神 *Dike* と称し、刻文には『我はこの男を都に連れ戻し、彼は父祖の館を治めるだろう』と書いてある」(642-648)。

エテオクレスは彼に答えている。「おゝ神々に狂わせられ、神々の大いなる憎しみの的、おゝ嘆かわしき限りのわがオイディプスの一族よ、あゝ父の呪いは今日成就する。しかし更に耐え難い悲しみが生まれぬように、泣いても嘆いてもいけない」(653-657)。そしてポリュネイケースについては彼がその名にふさわしく争いを好む奴だ、楯の上の紋章が彼をどこへ連れていくかは今に分る。その楯の上で狂い立つ心でたわ言を言っている黄金の文字が彼を連れ戻してくれるかどうかと言う。

エテオクレスは更につけ加える。「もしゼウスの娘、正義の女神 *Dike* が奴の行いと心に伴っていたなら、これこそ多分それであったろう。しかし奴が母の暗闇から脱け出た時も、養育の時も、青年になっても、またあごにひげが生えた時も正義の女神 *Dike* は奴に目をかけて大切にすることはない。また父祖の地を荒らす時に奴の側に立つこともない

と思う。大胆不遜な *pantolmos* 心を持った男と共にあるならば、それはまことに正しく偽りの名を持った正義の女神 *Dike* であろう」(662-671)。

彼はこう言うと、将軍が将軍と、兄弟が兄弟と、敵が敵と対決するのだから、ポリュネイケースに立向うのに自分より正しい *endikoteros* 者は誰かと問う。

この対話の中ではポリュネイケースにも王位を要求する権利のあることが正義の女神の姿を借りて表現され、使者もこの点に何の批評も加えていないが、エテオクレスはそれに対して過剰なまでに反応し、その主張を斥ける⁽¹⁹⁾。これは伝説では二人の兄弟が王位を継いだ時に交代でその座に就くことが約束されていたにもかかわらず、エテオクレスはポリュネイケースの番になっても王位を譲ろうとしなかった。そのためにアルゴスに逃れたポリュネイケースがアルゴス王アドラーストスを説得してテーバイを攻撃したことになる⁽²⁰⁾。この兄弟の側からの正当な要求に対してエテオクレスが必要以上に興奮して、相手の側の正義を否定し自分の正当性を主張していることがここに表われている⁽²¹⁾。

アイスキュロスの劇では「正義」の概念は相対立する仇敵同士がそれぞれの立場の正当性を主張する時に用いられ、その争いが報復を呼んで限りない報復行為の悪循環を生じ、⁽²²⁾「正義の女神」はあたかも「復讐の女神」であるかのような様相を呈する。この対立が一族の中に代々伝えられる時にそれは正に典型的な悲劇を形づくり、これは『オレスティア三部作』に顕著なのであるが、この一組の対話においても正にその「正義の相剋」が一族の悲劇へと発展していく様子が表われている。ポリュネイケースは「正義の女神」が自分を祖国に導き帰る様子を楯に描き、エテオクレスはそれを「偽りの正義の女神」だというのである。ここにおいて双方の権利の主張はまことに眼に見るように写実的に描写され、この「正義」の争いは、両者の武器で決着を見なければ済まないという成り行きが力強く表現される。

コロスはこのエテオクレスの反応の中に正義の主張よりも、王位を要求する兄弟に対する彼の深い憎悪と血の臭いを嗅ぎつけ、その争いを止めさせようと忠告する。「悪しきことを言う者と激情 *orge* において等しくなるとはなりません、アルゴス人とカドモス人とが闘うだけで充分です。流された血は贖うことができます *katharsios* が、二人の兄弟の互いの手による死には、その穢れ *miasma* が古びることはないからです」(677-682)。

しかしエテオクレスは、もし禍いを蒙るなら恥辱は避けなければならない、そのみが死者にとっての利益だからであり、禍いと恥とが一緒になったらどんな名誉もないと答

える。

ここでテーバイの七つの城門を追って城壁を一巡した使者の報告とそれに対するエテオクレースの応答の組合せは終り、最後に明らかになったエテオクレースの兄弟に対する憎悪と対決の執念をめぐってコロスとの間に対話がなされる。コロスはもはや劇の前半に見られたような恐怖に戦き取り乱した女性ではなく、兄弟の血を求めて破滅に急ぐエテオクレースを諷める冷静な忠告者として表わされている。コロスの前半との立場の逆転は、彼に「わが子よ」 teknon(686)。と呼びかけることばに見られる。

コ「何を熱望しておられるのですか、わが子よ？

狂暴な槍に狂う迷妾 ate があなたを駆り立てぬように、
禍への熱情をお棄てなさい」。

エ「神が事を急がせられるのだから、

ポイボスによって憎まれるラーイオスの一族は全て、
コーキュトスの波を運命に従って追風を受けて下っていけ」。

コ「心を苛む欲望があなたを駆り立てて、

掟の許さぬ ou themiston 血を流すよう
殺人の苦い果実を摘ませるのです」。

エ「それはわが父の厭わしき黒き呪いが、

乾ける涙なき眼でまとわりつき、
後れて死ぬより先に死ぬことの利を説くからだ」。

(686-697)

この 697 行の解釈には異論があるが、「後で死ぬよりも望ましい利点（すなわち雄々しく戦って早死すること）」と取るにせよ、「先に利益（名声）が来て、次の死が来るということ」と取るにせよ、エテオクレースはこの第七の城門でポリュネイケースと戦って、相討になることが避けられない運命であることを悟っている⁽²³⁾。それを避けるためにはこの城門に他の部下を差し向ければ良いのだが、それは王としての誇りが許さない。そしてその決意の背後にあって彼の意志を導いているのが、王位を等しく正当な権利によって要求する兄弟への憎しみである。しかし彼はその感情を父王オイディプースの呪いによるもの、アポローンの怒りによって一族に代々伝えられる呪いによるものと信じ、あるいは強弁して自らの手による兄弟殺しへと突き進むのである⁽²⁴⁾。避け得る悲劇を必然と信じて選択することが悲劇でありそのような激しい性情が一族の呪いとも解釈できるのではな

いだろうか。コロスはそれを感じ取って ate に駆り立てられぬよう忠告しているのである (25)。

コロスは更に続けてエテオクレースの破滅に向う意志を翻えそうと試みる。

コ「いいえ、逸ってはいけません。

人生を無事に過しても悪しざまに言われはしません。

神々があなたの手から犠牲を受けたなら、

黒い皮衣のエリーニュスは館から立去らないででしょうか」？

エ「どうも我々は既に神々に見限られたようだ。

破滅に瀕している我々からの感謝は驚きをもって受け取られよう。

どうして滅びの運命にさらにへつらうことがあるのか」？

コ「それがあなたの傍に立っている今こそその時です。悪霊は気分が違って、

そのうちにもっと穏やかな息づかいに風向を変えてやって来るでしょう。

今はまだ荒れ狂っていますが」。

エ「それはオイディプースの呪いが怒り狂わせたからだ、

夢の中に現れて父親の財産を分配した幻影はあまりにも真実だった」。

(698-711)

このようにエテオクレースの激情を和らげようとするコロスの説得に彼は耳を貸さない。コロスはそういう彼に対して「たとえ嫌でも女に従いなさい」(712)というが、これは外敵への恐怖に取乱す女たちを叱責する冒頭のエテオクレースの立場とは形勢が逆転している。そして第七の城門に行くことを止めさせようとするコロスに対して「神々が送られた以上、禍いを逃れることはできない」(719)と言い棄てて、エテオクレースは「兄弟の血を穫入れに」(718)対決の場へと向う。

まとめ

本文で七つの城門の攻防をめぐる使者の報告と、それに対するエテオクレースの応答を分析する中から kompos ということばが key word として浮び上って来た。これは自分を育んだ母なる土地に不正な戦いを挑むポリュネイケースを助けてテーバイを攻撃するアルゴス側の將軍の神をも恐れぬ傲慢不遜を強調し、その破滅を予期せしめるために効果的に多用されていることばである。そしてこのことばは第一の城門から第五の城門に向う五人の將軍にのみ適用されて、他の二人アムピアラースとポリュネイケースとの対照を際立

たせる効果も持っている。

ところでこの *kompos* ということばそれ自体は、ギリシア悲劇の中で特に神々に憎まれる悪徳の代表的なものとされている *hybris* と全く同じ比重でふつつ使われているわけではない。それは L-S によれば本来二つの固い物同士がぶつかり合って発する物音や騒音を意味し、それが比喩的に用いられると *boast*, *vaunt* という意味になる。そしてこの意味で「ゼウスは大口を叩く人の *kompos* を憎む」(S.Ant.127) とあるように、神々の怒りを招く人間の思い上りを表わすものとして悲劇でこのことばが用いられることもあるのだが、⁽²⁶⁾ その頻度は *hybris* に比べてずっと少ない。

ところがこの動詞形 *mega kompazein* (S.Aj.1122), *logon kompazein* (A.Ag.1400) は「大きな口を利く、大言壮語する」とか、複合語 *hyper-kompos*, *hyper-kopos* などは

のように *hybris* に近い意味を帯びて、神を恐れぬ不敬な思い上りを表わすようになる。この表現といえども決して広く用いられているものでないだけに、Septem の第二エピソードの第一から第五番目の将軍の性格を描写するという極めて限定された場所で、このことばが丹念に注意深く用いられているという事実に着目して、詩人の意図を考察する必要がある。

そこでテーバイの七つの城門に向う始めの五人の将軍と後の二人を較べてみると、先の五人は単純に己れの力を誇り、神をあなどり、敵に威嚇の叫びを挙げるのに対して、後の二人は少くともその攻撃の結果の死を予期して不敬な言動に及んでいないということが分る。正義の人アムピラーオスはもちろん敬虔な人として描かれ、その楯にも何も描かれてはいず、大言壮語して傲慢の咎めをこうむる恐れはない。予言の力によって自己の死を予期しつつも誓約に従って従軍する彼の挙動は、エテオクレスも讃嘆せずにはおかない。

ポリュネイケースにしても、エテオクレスの眼にこそ祖国に戦いを挑む非道な男と映るだろうが、使者の描写には彼を非難することばは見当らず、神々に対する不敬な言動も報告されていない。正義の女神が彼を導く楯の紋様も、彼にとっては十分な根拠があり、また彼なりの敬虔の念から発したものである。むしろそれを偽りの正義とけなすエテオクレスの独善と兄弟への憎しみの方が強く浮び上っている。そしてここで注目すべきはポリュネイケースもまた勝利の後の「相討の死」を予期していることである。父王オイディプスの呪いが成就して、二人の兄弟が互いの手で殺し合う時がこの日であることを意識しているのはエテオクレスだけではない。ポリュネイケースもまた自己の死を予期しつつ第七の城門を攻撃し悲劇の完成に与っているのである。

このように先の五人の将軍とこの二人とは、自己の死を予期しつつもその運命を避けようとしないう、悲劇創作の上で異った性格づけをする必要があり、その必要から先の五人の性格を極めて単調に傲慢不遜なものとし、その描写に意識的に kompos-words が用いられたと結論して良いだろう。

さてこの劇は始めから終わりまで主役はエテオクレス一人であり、使者やコロスの役目は補助的なものであるために「エテオクレス一人の劇」だといわれている。いい換えればハムレットだけが登場する「ハムレット劇」⁽²⁷⁾なのである。しかし第二エペイソディオンだけでも 351 行という長大な部分で、使者が長々と報告しているのは単なる舞台の外のできごとではない。それは舞台の上に実際にその七人の将軍が登場しているのと同様な効果を与え、詩人が伝えたいと思う内容をより正確に観客に伝えることができるという利点を持つために、単なる古悲劇の二人俳優の制約から生じた手法の枠を越えて、多数の俳優が登場する劇に劣らない内容を持っている。つまり表面的にはエテオクレス一人の劇のようであるが、内容的には七人の将軍も「登場する」劇なのである。特にポリュネイケースは、エテオクレスの another self として彼自身の姿に影のように寄り添い、「もう一人の主役」の役割も果している。だからこそコロスも二人を区別せずに「二人はまことにその名にふさわしく不敬の故に滅んだ」(ポリュネイケースという名は<ポリュス=多い>、<ネイコス=争い>即ち<争い多し>という意味を持つ)(830)と言っているのである。

ところでこの滅びの予期に関して、エテオクレスがテーバイを守るために、「理想的な支配者」として自分を犠牲として捧げることを決意していたとする考え方と⁽²⁸⁾、それとは逆に父の呪いに導びかれてやみくもに破滅に急ぐ激情に「目の眩んだ」王の姿を彼の中に見る考え方とがある⁽²⁹⁾。そして後者の考え方の根拠として「お、ゼウスよ、大地よ、そして町を守る神々よ、また父の強力な呪いのエリーニユスよ」(69-70))という冒頭の祈りを挙げたり、あるいは使者が敵の将軍を報告する前に、既に第七の城門を自分が守ることに決めている(285)という点を挙げたりする意見がある。そして 653 行以下のオイディプースの一族の滅亡を叫ぶ彼のことも、劇の前半で恐怖に惑うコロスを叱責する英明な君主が、ここで突然錯乱して滅亡に突き進んでいくのではなく、オイディプースの呪いの成就の予感はずっと劇の始めから一貫して底流として背後に潜んでおり、それがここで表面に、出て来たとするのである。

エテオクレスが自己を犠牲にして祖国を救う「理想的な支配者」であるという解釈には、兄弟への憎しみからその血を求めて己れの手で討ち取ろうとする ate に憑かれた王の

姿が欠落している。しかしエテオクレスが既に冒頭で自己の死を予感しているという解釈に立てば⁽³⁰⁾、「オイディプスの呪い」という運命の手、あるいは強迫観念によって、しゃにむに兄弟対決に自分を追い込んでいく彼の行動が不可避な必然の筋道であるということを観客にも納得できるように、詩人がこの劇を構成していることが一層はっきりして来る。またこの観点に立って劇を見るときには、エテオクレスに兄弟対決の悲劇を避ける自由があったかどうかという議論は空疎なものになって来る。

アイスキュロス劇の特質は、神々の与えた宿命を人間の手によって成就していくところにある⁽³¹⁾。しかしこの二重性は直接には当事者の心の中、受け取り方の中にあるのであって、第三者の眼にはその人間的な側面、すなわち「意志」の面の方が強く表われて来る。それ故にコロスはエテオクレスの「滅びに向う意志」を鋭く察して(686ff.)、その破局を回避させるように努力するのだが結局不成功に終る。否むしろ説得が功を奏せず呪いが成就することこそ神々の意志であり、コロスもそれを認めざるを得ない(833,850,887-8)。

兄弟の対決が三代にわたる一族の呪いの総決算であり、またそれに終止符を打つものとして、エテオクレスは第七の城門をその対決の場を選ぶ。兄弟の血を流すなど制止するコロスを振り切り、敵味方の将士の注視する中を、滅びの運命を分ち合うために一步一步進んでいくことこそ正に「オイディプスの呪い」の本質なのである。

そしてこのような劇的緊張を盛り上げるための道具立てが⁽³²⁾、テーバイを囲む七つの城門であり、それに配備される七組の將軍たちであり、その武器と言動でなのである。テクストを読むだけでは冗漫とも見えるこの第二エペイソディオンに、実は詩人の創作上の細心の注意が払われているのであり、その技巧の一つが円環状に並ぶ七つの城門の内と外とに配備された七組の將士、力に傲り神を軽んずる先の五人の將軍と自己の死を予期する敬虔なアムピラーオス、そして互いに相手の手による滅びを予期してその宿命の対決に向う二人の兄弟という対照である。そしてこの対照を際立たせる鍵になるものにこの kompos-words があると言うことができるだろう。

註

- (1) Romilly, J.de; *Time in Greek Tragedy*, p. 59ff.
- (2) この城門の名称と将軍の名前は伝承に差異がある。アポロドーロス 3.6.6-7, Euripides, *Phoenissae* 105ff., 1090ff.
- (3) Kitto, H.D.F.; *Greek Tragedy*, p.46, 52.
- (4) これは二人の俳優から三人の俳優に向かう「臆病な試み」といわれる。
Rose, H.J.; *A Commentary on the Surviving Plays of Aeschylus*, p.103.
- (5) Wolff, E.; *Die Entscheidung des Eteokles in den Sieben gegen Theben* , p.89.
- (6) Lesky, A.; *A History of Greek Literature*, p.249.
- (7) Rose, H.J.; op.cit., p.196, "the personified Modesty."
- (8) Gagarin, M.; *Aeschylean Drama*, p.204, n.10.
- (9) 「巨人」とは神々に対する傲慢を表し実際の身体の大きさを意味するだけではない。
Rose, H.J.; op.cit. p.197.
- (10) Murray, G.; *Aeschylus の読み方*を取る。kompoi とする方がこの論文の主旨にも適する。
- (11) "He gives rein to his tongue,"(441), Rose, op.cit., p.198. (
- (12) Italic, *Index Aeschyleus*, "per nares superbas sonans", "they, like their masters, are uttering threats", Rose, op.cit. p.200.
- (13) 「異国風」とはアルゴス人にペルシア人の連想を重ねていることから来る。
Rosenmeyer,; *Seven against Thebes; the Tragedy of War* , p.44.
- (14) ことばによらず行為による "metaphorical boast," Rose, op.cit., p.201.
- (15) Adkins, A.W.H.; *Moral Values and Political Behaviour*, p.88.
- (16) これはアイスキュロス以後においては不敬に当たるといわれる。Rose, op.cit., p.205.
- (17) 川島「終わりへの期待と不安」, p.74.
- (18) 1-3, 208-210, 760, 769, 795-796.
- (19) Rosenmeyer, op. cit., p.57.
- (20) アポロドーロス『ギリシア神話』、3.6.
- (21) Gagarin, M.; op.cit., p.122.
- (22) 池田,「アイスキュロスの Oresteai における dike について」, p.22、
川島「終わりへの期待と不安」 p.11ff.

- (23) Lattimore, R.; *Story Pattern in Greek Tragedy*, p.8.
- (24) Rosenmeyer, op.cit., p.57.
- (25) cf. Lesky, A.; op.cit., p.32ff.
- (26) "kompos," Aeschylus 4 例, Sophocles 2 例;
"hybris," Aeschyleus 15 例, Sophocles 21 例.
- (27) Kitto H.D.F.; op. cit., p.47, しかし彼は "It is Hamlet without Prince."と言っている。
- (28) Fritz, Kurt v.; *Antike und Moderne Tragoedie*, p.193-198, ここにはこの劇の研究史が簡潔に要約されている。
- (29) Patzer, H.; *Die Dramatische Handlung der Sieben gegen Theben*, ss.100-105, "Verblendend"
- (30) Lesky, A.; op.cit., p.249.
- (31) Lesky, A.; op.cit, p.37, Wolff, E.; op.cit p.94.
- (32) Patzer, op.cit. P.99.

まえがき

アイスキュロスの『テーバイを攻める七人の将軍』(前 467 年)は、オイディプースの二人の息子の争いを主題にしている。オイディプースがあれほど怖れて逃れようとしていた運命、「父を殺し、母と結婚する」というアポロンの予言を自分が遂に実現してしまったことを悟って、彼が自分の眼を突いて盲目になった後、彼の二人の息子は父に代ってテーバイの王位に就いた。彼等は一年交代で王位を譲り合う約束をしていたが、エテオクレスはそれを守らず、憤激したポリュネイケースはアルゴスに逃れてその地の王アドラストスの婿となり、彼の援助を得て力で王座を奪還せんとして祖国テーバイを包囲する。七つの城門を持つことで名高いこの都を落そうと、彼を含む七人の将軍がそれぞれの城門に向う。するとエテオクレスも彼らに対抗して選りすぐりの勇士を送って迎え討ち、彼自身は宿敵となったポリュネイケースと対決するために第七の城門に赴く。この情景を克明に使者の報告によって叙述する場面がこの劇の中心部分を占めている⁽¹⁾。

エウリピデースも『フェニキアの女たち』(前 409 年)において同じ主題を扱いながら独自の伝承解釈を打ち出した。その最大の相違点は、オイディプースが自分の不幸な運命を知って盲目になる前に王妃イオカステは縊れて死んだという従来の伝説を変えて彼女を生き延びさせていることである⁽²⁾。彼女は悲惨な兄弟相剋を止めさせようとして彼等を説得するが失敗し、相討ちの死を遂げた二人の死骸の上に折り重って自害して果てる。この劇では兄弟対決の戦闘場面の報告が中心部分を占めているが、七将の城門攻撃の報告が欠落しているわけではない。むしろそれはアイスキュロスを意識して、彼の手法を踏襲しつつ別の形式で叙述されている。この論文は両作品のこの七将の城門攻撃の場面を取上げて、その描写の手法と特徴を対比しつつ劇の構造を分析しようと試みている⁽³⁾。

この両作品の上演の間にはほぼ半世紀を超えるギリシア世界の激動期が挟まれている。ペルシア戦争という国難を克服してエーゲ海に覇者として君臨したアテーナイは間もなくスパルタとの泥沼の戦争状態に陥り、その築き上げた文化的、経済的繁栄を犠牲に供した。人々は長い戦争に倦み、戦争指導者たちに対する批判が共感を呼ぶようになった。人々のより知的な懐疑的な精神状況も古い時代の単調で生硬な劇構成に満足しなくなり⁽⁴⁾、更

に複雑で急速な場面展開、より多い登場人物の間で交される洗練された軽妙な会話、異なる伝承を採用することによる悲劇の新解釈といったものが要求されるようになる⁽⁵⁾。

エウリピデースの劇は多分にそういう新しい要求に応えるものであるが、このテーバイ攻略劇の「七将の城門攻撃の場」にもその一端が明確に現われている。この論文ではその場面において、七人の将軍を紹介し、その性格を描写する際にどのような手法が用いられ、それが二人の作家の間でどのように異っているかを詳細に検討している。ある人物の性格を描写する時に、その人物の持物を微細に描くことによって所有者の特質を表わそうとする手法が古代の文学には見られるが、この劇においては将軍たちの持つ「楯の紋様」の描写がそれに相当する⁽⁶⁾。

七将の紹介は他にエウリピデースの『救いを求める女たち』（前420年）、ソポクレスの『コロノスのオイディプース』（前401年）の中でも行われるから、それらの場面も併せて上述の観点から検討を進めていく。その場合の順序は上演年代の順によらず、内容が簡略なものから複雑なものへと進んで比較し、最後に七将の死後に彼等に与えられた讃辞をも加えて論述する。アイスキュロスの劇の場面に関しては複雑で長大なために一覧表の形式で比較の便を計った。

1 『コロノスのオイディプース』

ソポクレスの『コロノスのオイディプース』においては、アルゴス側の七人の将軍は単にその名前が紹介されているだけであって彼等の性格描写はほとんどなされておらず、従ってその叙述に比喩などの修飾の加わる余地は無い。テーバイを征服する目的で軍勢を集めたポリュネイケースは、勝利のためには父オイディプースの助力が不可欠であることを知り、彼を連れ帰ろうとしてアッティカのコロノスに来る。彼は盲目の父親に自分がアルゴス軍を味方につけた経緯と、他に六人の有能な将軍が自軍には居ることを語る。「私がドーリスのアルゴスにやって来た時、アドラストス殿を舅となし、アピアの土地で槍の術に優れて並び無く名高い誉を受けている人々と盟約を結びました。それはテーバイに向う七隊の槍兵の軍団を彼らの助けによって糾合し、正義に殉じて滅びるか、或いはこの不正を働いた者共をその地から追放するかという目的のためなのです。

ところで、なぜ今私がここに来ているのかそのわけを申しませう。お父上よ、私自身と私の同盟者とはあなたに嘆願者としてお願い申します。彼らは今七つの戦陣、七つの槍兵団を以ってテーバイの野をすっかり包囲しております。その面々はまず、槍を取って

は無双の者、鳥占いの道にも明るい槍の達人アムピラーオス。第二にはアイトリアの人、オイネウスの子チューデウス。第三にはアルゴス生れのエテオクレス。第四にはヒッポメドーンを、父親のタラオスが送って寄越しました。第五にはカパネウスが、テーバイの町を火で滅ぼし掠めてやると豪語しています。第六にはアルカディアの人パルテノパイオスが駆せ参じました。彼は処女時代を久しく過ごした後、漸く母親になった人から生まれたためにその名を得ました。アタランテーの信義に篤い息子です。そしてあなたの息子であるこの私、いやあなたの子でなければ悪しき縁から生まれた者、しかしあなたの子とも呼ばれている者ですが、私は恐れを知らぬアルゴス軍をテーバイに率いて行きます」(O.C.1301-1325)。

II 楯の紋様と性格描写

ソポクレスの劇においては七人の将軍は名前を紹介されるだけであったが、エウリピデースとアイスキュロスの劇では将軍たちの持つ楯の紋様が詳細に描写されている。特にアイスキュロスにおいてはその楯の描写だけで第二エペイソディオンが終始して、あたかも楯の紋様が作者の主な関心事であるような印象を与える。しかしこのように主だった登場人物の持物や武器の描写をこと細かにするのはホメロス以来の伝統的手法であり、ホメロスにおいては戦闘場面の急迫した情景からしばし聴衆の眼を転じさせて一息つかせる挿話の役目を果している。それはアカイア勢の会議に君臨するアガ멤ノーンの王笏(II.2,100ff.)、ヘクトールと戦おうとするアイアースの巨大な楯(II.7,219 ff.)、戦場に臨もうとするアガ멤ノーンの美事な鎧と楯の紋様(II.11,15 ff.)、トロイア軍の陣中に忍び込もうとするディオメデースとオデュッセウスとが借り受けた兜の持え(II.10,254 ff.)、とりわけアキレウスの為にヘーパイストスが新たに作り上げた楯の紋様(II.18,478-608)はその部分だけで第18巻の大部分を占めるほどである。だがホメロスの場合は話の本筋を離れてそれぞれの武具の描写そのものに重きが置かれるのに反して、悲劇作家の場合は楯の描写によってその持主である将軍の識別と性格づけまで行おうとする意図を伴っている⁽⁷⁾。それを明らかにするために各作品において描かれている将軍の例を取上げて検討してみよう。

III・1『イーリアス』の物見の場面

『イーリアス』の第三巻に「物見の段」と呼ばれる場面がある。これはトロイアの城下

に対峙するギリシア軍とトロイア軍が、無駄な流血を避けてこの争いの当事者であるメネラーオスとパリスの間で対決して事を決着させようとする場面である。その二人を間に挟んで向い合う両軍を城壁の上から見渡ししながら、ヘレネーは義父のプリアモス王にギリシア側の主だった将士の名を紹介する。その場面ではまずプリアモスがある勇士の外観を描写して指し示しながらその名を問うと、ヘレネーがその名を答え、またアンテーノールが補足する。この場で名前が挙げられ詳しい説明が加えられているのは、アガ멤ノン、オデュッセウス、アイアース、イードメネウスだけであるが、ヘレネーの説明は他の将士にも及んだことを推察させる⁽⁶⁾。

III・2『フェニキアの女たち』の物見の場面

『フェニキアの女たち』にもこれと良く似た「物見」の場面がある。これはアンティゴネーと守役の老僕とが館の最上階に登り、テーバイの町を包囲するアルゴス軍を見渡し、部隊を指揮する将軍の名をアンティゴネーが問うと老僕がその名を答えるという形式を繰り返す、この場面では兄ポリュネイケースの姿を捜し求めることが彼女の主な目的ではあるが、作者はそれと共に公平に他の将軍の姿をも描写する。その際に重きを置かれるのが武具とその形状である。老僕は楯の紋様とその持主に詳しい事情をこう説明する。「あなたの兄上様の許に休戦条約を持って伺った折に楯の印しを見て詳しくなりました、それを見て武具の持主が分るのです」(Ph.142-144)。しかしこの場面では楯の描写は七人すべてに及んでいるわけではない。アンティゴネーはまずヒッポメドーンについて問う。「あの白い兜飾りは誰、青銅造りの楯を腕に掲げて軍勢の先頭に立って率いる人は」?「あれはミュケーナイの生れと称し、レルネーの流れの傍に住まうヒッポメドーン殿です」。「ああ何と傲り高ぶった *gauros*、何と見るも恐ろしい、大地から生まれた巨人にも似た姿でしょう。絵模様は星と輝き、死すべき生まれの者とも見えない」(Ph.119-130)。

次にテューデウスについて問う。「それぞれ武器の様子が違うのね、あの人は誰」?「オイネウスの子と生まれたテューデウスです。アイトリア風の戦意を胸に秘めています」。「おお爺や、あの方がポリュネイケースのお嫁さんの妹を妻にしている人なのね。何と変わった異国風の武装でしょう」。「アイトリア人はみな楯の遣い手で、槍にかけては狙った的を外さないのです」(Ph.132-140)。

第三に彼女はパルテノパイオスを示す。「ゼートスの墓の傍を巻毛をなびかせて進んで来る人は誰、見るも恐ろしい目つきをしたあの隊長の若者は?重装備の一団が彼の後につき

従う様はどうでしょう」。「彼はアタランテーの息子パルテノパイオスです」。「山々を彼の母親と共に急ぎ行くアルテミス様が彼を弓で射て殺して下さるように、私の都を荒らそうとやって来た男ですから」(Ph.145-153)。ここでアンティゴネーのことはを受けて言う老僕の返事が見過ごしにできない。「そうなるの良いのですが、お姫様、しかし彼らはこの地に正義と共に(正当に)来ているのです。だから私は神々も正しく見そなわすのではないかと恐れるのです」(Ph.154-155)。

第四に彼女は兄ポリュネイケースの姿を捜す。「私と同じ母から生まれ苦勞の多い運命を負っているあの方はどこに、ねえ爺や、ポリュネイケースはどこに居られるのか言っておくれ」。「あの方はニオベーの七人の娘の墓の近く、アドラストスの傍に立って居られます。お見えになりますか?」「見えます、しかしぼんやりと、でも姿形と胸もとがやっと判るだけ。ああ風のように疾い雲の足によって空中をお兄様のところに駆けて行きたい、そして長い間亡命者として苦しんだ、愛する方の首のまわりに腕を投げかけたい。黄金の武具に際立って、なんと朝日の光線のように輝やいておられることか」。「あの方はこの館に来られるでしょう、休戦条約の下にあなたを喜びで満たそうと」(Ph.156-171)。ここではアルゴス王アドラストスについても同時に言及がなされるが、ポリュネイケースに対するアンティゴネーの思慕の強さを示すことに重きが置かれている。

次に第六番目の将軍としてアムピアラースについて問いがなされる。「あの方は誰、ねえ爺や、白馬の挽く車の手綱を取る人は?」「あれは予言者のアムピアラースです、お姫様、大地の血を好む流れは彼が捧げる犠牲が流すのです」。「おお輝やける帯をした太陽の娘の月の女神よ、金色の光の環よ、なんと物静かに思慮深く若駒に鞭を当てて御しておられることか」(Ph.172-179)。アルゴス側でただ一人戦争に反対した彼は、このように讃えられて紹介される。

そして彼とは対照的に好戦的なカパネウスが最後に示される。「どこに居るの、この都にあのような恐ろしい侮辱を与えた *hybrizein* 男は?」「カパネウスですか? ああ男は城壁の高さを上から下へと測りながら、塔屋の攻め口を計算しています」。「ああ憤りよ、そしてゼウスの轟く雷鳴よ、雷霆の燃えさかる炎よ、彼の不遜な高言 *megalegoria* を眠らせて下さい。この男こそ、槍で捕われたテーバイの娘たちを、ミュケーナイのレルネーの泉、ポセイドーンの三叉の戟によって湧いたアミュモーネーの水を汲む奴隷仕事に引き渡すと言っているのです。決して決して女神様、ゼウスの子なる黄金の髪のアルテミス様、そのような奴隷の身に落ちることがありませんように」(Ph.180-192)。カパネウスは他の劇

でも雷に打たれて死ぬことになっているが、それが彼の高言と不遜な態度に関わっていることが注目される。

III・3 将軍たちの楯の紋様

アンティゴネーの「物見」の場面においては将軍たちの描写は、遠くから見える外見と勇猛さを表わすことが主眼で、楯の描写にはそれほど重点が置かれていなかったが、以下の使者が報告するテーバイの城門攻略の場面では、将軍たちの持つ楯の紋様の描写が最も重要な位置を占めている。これは明らかにアイスキュロスの劇の同じ場面を念頭に置いて書かれたものである。アイスキュロスにおいては使者、エテオクレース、コロスの三者の間で七つの城門のそれぞれについて対峙し合う将軍の戦う様を語り、将軍の性格描写の手段として楯の描写が入念になされていた。エウリピデースのこの劇においては、その楯の描写と戦闘場面は切り離されて、それらはいずれも舞台外の事件として使者の報告の中に含まれてはするものの、事態の推移に動きと間を与え、硬直化を免れる努力が試みられている。しかし楯の描写の場面があまりにも圧縮されて述べられているので、それは単に楯の一覧表を展示するような感を与え、アイスキュロスのような画一性を避けようとして一層単調になっている。以下にその楯の紋様の報告の場面を記して内容を確かめてみよう。

各々の城門の名とそれを攻める将軍の名にはアイスキュロスの場合とずれがある。まずネーイスタイ門を攻めるのはパルテノパイオスである。「楯の真中にはアタランテーが遠矢を射る弓でアイトリアの猪を仕止めている家伝の紋様があった」(Ph.1104-1109)。この図柄は彼の母親がカリュドーンの猪退治に参加した伝説を描いたもので、間接的に彼の武勇をも表わしている。

次にプロイティデス門に向うのは予言者アムピアラーオスである。「彼は戦車に犠牲を乗せ、高慢な *hybrismena* 紋章をつけず、思慮深く無紋の武具を着ていた」(Ph.1110-1112)。彼は正義の人として知られ、陰謀にかかってその意に反して戦争に参加したのであるが、その敬虔な人柄を反映して楯には紋章がない。武勇を誇ることは他面では高慢の危険があるとエウリピデースも考えていたことをこの場面は示している。

オーギュギア門にはヒッポメドーンが攻め寄せる。「楯の真中には百の眼で睨みつけるパノプテース(アルゴス)の紋章をつけていた。その眼の中のあるものは星が現われる時に開き、また別のものは沈む時に隠れたが、その様は後に彼が死ぬ時に見ることができた」(Ph.1113-1118)。イーオーを蛇と共に看視して苦しめたアルゴスは後にヘーラクレースによって打殺された。ヒッポメドーンはこの伝説と関りが無いが、怪物の力を借りて敵を脅

そうとするのである。

ホモローイデス門にはチューデウスが向う。「楯の上にたてがみを逆立てた獅子の毛皮を張り、巨人のプロメテウスが都に火を放とうと右手に炬火をかざしていた」(Ph.1120-1122)。チューデウスはポリュネイケースとアドラストス王の館の前で争い、彼らの持物あるいは紋章から、予言に示された「獅子と猪」はこの二人を示すものと悟った王が彼らに自分の娘を縁組みさせるので、この紋章は彼らにとって重要な意味を持つ(Ph.408ff., Supp.132ff.)。しかし伝承によってその細部は異なる⁽⁸⁾。

クレーナイアイ門に来たのがポリュネイケースである。「楯の上の紋章はポトゥニアイの悍馬が驚き恐れて跳ねまわり、把手の下の回転軸を内側からうまく回すと、荒れ狂うように見えた」(Ph.1123-1127)。この悍馬はグラウコスが人肉を与えて育てたために遂に自分が喰い殺された牝馬であり、敵を威嚇する目的で付けられたものだろうが、この一風変わった仕掛けについて記したエウリピデースの意図は理解し難い。アイスキュロスでは正義の女神が彼を故国に連れ帰る様が描かれているのであるが。

エレクトライ門に向ったのは、アレースに劣らず戦意に逸るカパネウスであった。「その鉄を張った楯の上には、大地から生まれた巨人が挺子で町を土台から引き剥がし、その両肩に町全体をかつぐ姿が描かれ、都もこのような運命に遭うものと危ぶませた」(Ph.1130-1133)。七将の中で最も傲慢不遜で戦意に溢れるカパネウスについての描写はここでは単調である。

最後に七番目の城門に立ち向うのは全軍の長アドラストスである。「楯の図柄を百匹の毒蛇が満たし、左手にアルゴスの誇りである大蛇を持っていた。その蛇どもは城壁の只中からカドモスの子らを掠っていくところだった」(Ph.1135-1138)。アルゴス王アドラストスは二人の婿ポリュネイケースとチューデウスの頼みで全軍を動かし指揮を取っているので、アルゴスを象徴するレルネーの大蛇を紋章にしているのである。七将の中で彼だけが生き残る。

III・4 将軍たちの戦死の場面

テーバイの七つの城門を攻める七人のアルゴスの将軍たちが持つ楯の紋章を描写した後に、それぞれの将軍たちの奮闘ぶりと戦死の様子が語られる。この場面もアイスキュロスにおいては、彼らの傲慢と死の様とが関係づけられて楯の紋様に象徴されていたのだが、エウリピデースにおいてはそれほど強い関係づけは為されていない。しかしそこに記された四人の将軍の戦いぶりと討死の様子には彼等の性格が反映されているので、その象徴と

して楯の紋章を読み取ることは容易である。エウリピデースの意図は明確にことばでそれを表現することを避けながら、おのずと理解させることを狙ったものであろう。

両軍が戦闘を開始してテーバイ側が優勢に立った時にチューデウスとポリュネイケースは味方を叱咤し鼓舞した。「ダナオイの子らよ、飛道具に圧倒される前に、軽装兵も騎兵も戦車兵もなぜ全てが一勢に城門を攻撃することを怯んでいるのだ」(Ph.1145-1147)。その叫びを聞くと全員が突進して激しい戦闘が行われ、敵味方双方に多くの戦死者が続出した。その中にまずアタランテーの子パルテノパイオスが居た。「彼は旋風のように城門に襲いかかると、都を掘り覆えそうとして、火とつるはしを求めて叫んだ。しかし荒れ狂う彼を海神の子ペリクリュメノスが止めた。胸壁から車を充たすほどの軒石を外し、彼の頭に打ちつけて、金髪の頭を砕き頭蓋骨の縫合を壊して、紅いの頬を血まみれにした」(Ph.1154-1161)。戦意に荒れ狂うカパネウスの死の様子も描かれている。「彼は長い攻城梯子を掴んで登り始めた。そしてゼウスの聖なる火といえども彼が都の城砦の頂きを占領することを防ぎ得ぬというような高言を吐いた *ekompace*。このように宣言すると降り注ぐ石を楯の下に身を縮めて避けながら這い登った、梯子の滑らかな段を交互に上りながら。彼が遂に城壁の軒石に足を掛けると、ゼウスは雷霆で彼を撃った。大地は鳴り響き、全ての者は恐れた。彼は手足がバラバラになって梯子から放り出され、頭髮は天空に、血は大地に、手と肢はイクシーオンの車さながらに回転した。そしてその骸は炎に包まれて地へと墜ちた」(Ph.1173-1186)。エウリピデースにおいては七人の將軍の中二人のみが戦死の場面を克明に描写され、そしてまたカパネウスだけがゼウスに対し不遜な言葉を吐く *kompacein* ために罰を受けて死ぬ。この場面はアイスキュロスにおいては五人の將軍に共通な最期の迎え方であり、エウリピデースはそれを長々と叙述することを避けて上記の二人だけで代表させたのである。それはすべてを全篇の山場であるエテオクレースとポリュネイケースの一騎討の場面に集中するために、他をできるだけ省略したのであろう。

III・5 兄弟対決の場面

さて二人の兄弟の一騎討の場面と、相討に倒れた彼らの遺骸の上で母イオカステーが自害する情景は、(Ph.1359-1479)の長大な行数を使って使者によって報告されるが、この争いに対する評価はこれに先立つ使者のことばの中に見出される。この報告と応答の場面はアイスキュロスの使者とエオテクレース、コロスの三者の組合せに対応しているので興味深い。

まず使者は二人の兄弟が両軍の無駄な流血を避けて一騎討で勝敗を決することに同意したと報告する。「おお、なぜ私に良き報せを伝えて立ち去ることを許さず、悪いことをも報告させのですか？あなたの二人の御子息は恥ずべきこと極まり無き蛮勇 *tolmemata aischista* を揮おうとされているのです、全軍とは離れて一騎討をしようとなさるのですから。それをアルゴス人にもカドモスの民にも同じように語られましたが、そんなことを決して言うべきではありませんでした」(Ph.1217-1222)と使者はイオカステーに伝えている。この中で全軍のために二人だけで事を決しようとする行為が「蛮勇、無謀 *tolmerna*」として非難されているとに注目したい。このことばは一面では「勇気ある行為」と見えるものを他の価値基準から否定するものであり、アガ멤ノンやクリュタイメーストラーの行為に関してアイスキュロスが用いている評価である。このことばが、両軍の兵士の「生命を無駄にする *psychas apempolan*」(Ph.1228)ことの無いようにと望んで、兄弟同士の対決で事を決しようとする彼ら二人に対する批判としてここで用いられていることの意味は重要である。これは作者が二人の行動の背後に個人的な憎悪に基く動機を置いて、彼らの行為を美化していないという見方を裏付ける。それだからイオカステーも娘アンティゴネーと共に彼らの争いを止めさせようとして対決の場に急ぐのである。

イオカステー「おおわが娘アンティゴネーよ、館の前に出て来なさい。神々の定めはお前がいま踊りや娘の嗜みを楽しむことを許さない。お前は人の勇士、お前の兄弟がまっしぐらに死に突き進み、互いの手で死なぬように母と共に防がねばなりません。—— 急いで、急いで、娘よ。息子たちが槍を交える前に間に合うなら、私の命は日の目を仰ぎ、彼らが死ねば私も死んで横たわるのですから」(Ph.1264-1282)。

それを受けてコロスも歌う。

「おお大地よ、おお大地よ、

二頭の獣が、血に逸る魂が

槍を振りかざして

すぐにも敵を血塗れの屍骸となすだろう。

惨めな子らよ、一騎討ちなど考えつくとは、

異国の叫び声を

悼みの嘆き歌を

遺骸のために、涙と共に歌い上げよう。

死の運命はすぐ近くにある。

剣が事を決するだろう。

不運な死、不幸な殺人、それも復讐鬼の為」(Ph.1295-1306)。

以上に述べようにエウリピデースは『フェニキアの女たち』において、アルゴスの將軍たちの性格を楯の紋章などで表わし、そこに示された彼らの高慢さが滅びにつながることを暗示して彼らの戦死の場面を描写する。彼がこの手法においてアイスキュロスに従っていることがほぼ明らかになったと思う。しかし彼はアイスキュロスの硬直した並列的な構成を避けて、劇の進行に合わせて場面を展開させ、アンティゴネーや使者、コロスの口を通してその描写を行わせた。この対照を明確にするために、アイスキュロスの「テーバイに向う七将」の性格描写を改めて考察してみよう。

IV・1 「テーバイを攻める七人の將軍」の性格描写一覧

アイスキュロスのこの劇は、第二エピソードの長大な対話部分において、使者とエテオクレスが報告と応答を繰り返し、それぞれの問答をコロスが神々への祈りで締め括るという構成を取る⁽⁹⁾。この対話において使者は七つの城門に向う敵将がいかに高慢で不遜なことばを吐き散らすか、その性格がいかに傲慢な武具の紋章で表わされているかを報告する。その各々に対してエテオクレスは応答し、敵将の傲慢が彼の破滅をもたらすと指摘しつつ、彼を迎え討つべく味方の勇敢で敬虔な勇士の配置を指示する⁽¹⁰⁾。そしてコロスは敵がその傲慢の故に神々の罰を受けて滅びるように祈る。この一々の問答を詳述するのは多大な紙数を要するので、その対比と構成が明らかになるように一覧表で示す⁽¹¹⁾。

第一の城門、プロイティデス門

報告:

- ・ 敵将、オイネウスの子チューデウス
- ・ 紋章、星と月を散りばめた装飾
- ・ 性格、「傲慢な紋章 hyperphron sema」と「高慢な武具 hyperkompos sage」

応答:

- ・ 紋章は傷を負わせない。夜空の文様は闇を意味し、持主の破滅を予示する。「高慢な紋章 hyperphron sema」は彼の「傲慢 hybris」に破滅を与える。
- ・ 迎え討つ勇士、アスタコスのメラニッポス
- ・ 性格、「廉恥の女神 Aischyne」を敬い、「高慢なことば hyperphron logos を嫌う。「正

義の女神 Dike」が彼を遣わす。

コロス:

国土を守るため、正しく dikaios 戦う彼に武運が授かるように。

第二の城門、エーレクトライ門

報告:

- ・敵将、ヒッポノオスの子カパネウス
- ・紋章、「町を焼かん」と言う松明を持った男の像。
- ・性格、人間の分を超えた「大言壮語 kompos」をする巨人。ゼウスの雷電も防ぐことができぬと不敬なことばを吐く。

応答:

- ・カパネウスは増長し phronema、脅迫を口にし apeilein、神々を軽んじ atizein、ゼウスに大言壮語 gegona epe を放つ。こういう男は雷に打たれて死ぬだろう。
- ・迎え討つ勇士、ポリュポンテースが守護の女神アルテミスと共に遣わされる。

コロス:

この町に高言を弄する megara epeuchesthai 者は滅び、雷に打たれるように。高慢な hyperkopoi dori で自分たちが追い立てられぬように。

第三の城門、ネイスタイ門

報告:

- ・敵将、イーピスの子エテオクロス
- ・紋章、アレースに挑戦して梯子を登る兵士の「不遜な 𐀀 ou smikron tropon」。
- ・性格、乗馬の「傲慢不羈な吐息 hyperkompon pneuma」によって象徴される獯猛さ。

応答:

- ・壮語 kompos を(ことばではなくて)実際に手中に持っている者を差し向けよう。
- ・迎え討つ勇士、クレオーンの子メガレウス。二人の敵(楯に描かれた男とその所有者)を捕えてやろう。

コロス:

都に対して高慢な hyperauchos ことばを吐く者に対して、裁き主 nemetor ゼウスが怒りを向け給うように。

第四の城門、オンカ・アテーナー門

報告:

- ・敵将、アリストマコスの子ヒッポメドーン
- ・紋章、口から黒煙を吐く怪物チューポーンと蛇。
- ・性格、バックスの信女のように楯を振り回して荒れ狂っている。その様は恐怖 phobos が大言壮語している kompezesthai ようだ。

応答:

- ・オンカ・パラスがこの男の傲慢 hybris を憎み、蛇から雛鳥を防ぐように都を守る。
- ・迎え討つ勇士、オイノプスの子ヒュペルピオス。彼は姿も心も非の打ち所が無く、彼の楯に描かれたゼウスが怪物を退治するだろう。

コロス:

ゼウスの敵を楯の上に持つ者が非運に遭うように。

第五の城門、北門ボッライアイ門

報告:

- ・敵将、アタランテーの子パルテノパイオス
- ・紋章、青銅製の楯に鋸で留めたスピックス、それはターバイ人を組み敷いて生身を喰っている。
- ・性格、槍を「神よりも崇める」。「乙女」という名にも似ず荒々しく恐ろしい眼付をしている。

応答:

- ・彼らの意図が不敬な大言壮語 anosia komposmata と共に彼らの上に起るように。
- ・味方の勇士、アクトール、大言壮語せぬ男 aner akompos を送ろう。彼は虚言を吐かず、怪物を持つ者を。撃退するだろう。

コロス:

不敬な者 anosioi が大言壮語する megalá megalegorein のを聞きたくない。神が彼らを滅ぼし給うように。

IV・2 「正義の士」アムピアラーオス

以上のように第五の城門に至までは使者の報告の中で敵がいかに傲慢不遜で神を恐れぬ不敬の言動をしているかが伝えられ、その象徴として楯の紋章が詳細に描写されている。エテオクレースは一々それに応答して不敬な敵を迎え討つ為に味方の敬虔な勇士を配備し、コロスは敵の破滅と味方の勝利を祈って歌う。この釣合いのとれた均一な構成が第六

の城門の報告に至って崩れる。それはこの城門に向うのが、全軍でただ一人無益な戦争に反対した「正義の人」予言者アムピアラーオスだからである。この構成を次に示そう。

第六の城門、ホモロイデス門

報告:

- ・ 敵将、オイクレースの子アムピアラーオス。
- ・ 紋章、無紋の盾。真の勇者は虚飾を嫌う。
- ・ 性格、知恵に富み、武勇に秀でた予言者。戦争の原因であるポリュネイケースとテューデウスを罵倒する。

応答:

- ・ 不正の者と同じ船に乗り込むならば敬虔な人といえども滅びる。不敬な者と交わる正義の人も神の罰を受ける。
- ・ 迎え討つ勇士、ラーステネース。心は老成し、肉体は若々しい勇者。

コロス:

神々が正しい祈りを聴き容れ、敵がゼウスの雷によって滅びるように。

IV・3 ポリュネイケース

この後に第七の城門をはさんでポリュネイケースとエテオクレース自身が対決する山場に劇が進む。ここでは両者が対等にテーバイの主権を要求しているので、一方が正しく他方が邪であるという表現はとらず、双方に正義を主張させるという構成上の配慮がなされている。

第七の城門

報告:

- ・ 敵将、ポリュネイケース
- ・ 紋章、正義の女神 Dike に導かれる武将、「我はこの男を都に連れ戻し、彼は父祖の館を治めるだろう」との銘がある。
- ・ 性格、特に傲慢にも邪悪にも表現しない。自分を追放した兄弟への報復を叫ぶのみ。

応答:

- ・ 正義の女神が不遜な男 pantolmos に味方するはずがないからそれは偽者だ。兄弟が相争うようにというオイディプースの呪いは今日成就する。

- ・迎え討つ勇士、兄弟である自分以外にはその相手はいない。

コロス：

「悪しきことを言う者と激情を競ってはなりません。狂暴な槍に狂う迷妄 ate に駈り立てられぬようにしなさい」と王を諫める。

これに続いてコロスは兄弟の憎しみに駈り立てられて対決の場に赴こうとする王に対して、冒頭の場面とは打って変わった冷静な態度で忠告し宥めるのであるが、彼はそれに耳を貸さず劇はクライマックスに向う。しかしその戦いは舞台の外で行われ、その様子は使者の報告を通して手短かに語られるのみである。二人の戦いの場面に関する限りではエウリピデースの劇の方が状況をずっと克明に描写している。アイスキュロスの劇では、既にそれは七つの城門を一巡して対決する敵味方の将士の描写によって語られているのみである。劇的緊張はポリュネイケースを討ちに第七の城門に向おうとするエテオクレースの決意とそれを押し止めようとするコロスとの問答の場で最高潮に達しているのであり、後の相討の死の報告の場面は付け足しである。しかしエウリピデースはその場面に劇の焦点を合わせ緊張を高めて行こうとして、「物見」の場面、「七将の性格描写」、將軍たちの「戦死」の記述というように、アイスキュロスでは一つの場面に集約されていたものを段階的に追っていったのである。それでも盛り上げ切れない劇的高揚を更に強めようとして、他の伝承とは異ってイオカステーの自害をその場面に加えたのであろう。筋の時間的な展開に合わせて場面を変えてクライマックスへと盛り上げて行くエウリピデースの手法は近代的ではあるが、単調な硬直した描写に見えるアイスキュロスの劇の中にもそれに劣らぬ内容が詰まっていることが上述の一覧表との対比で論証できたと思う。

V 「救いを求める女たち」の戦死者賞讃

「アルゴス軍の七人の將軍」をアイスキュロスの劇はテーバイ寄りに、エウリピデースの劇はアルゴス寄りに共感を持って描いているために、將軍たちの性格づけに偏りがあるが、そのいずれにおいても変わらないのが「正義の予言者アムピアラーオス」の扱いであった。他の將軍たちが鬪争を好み神々にも挑戦を辞さない傲慢不遜な戦士としての性格づけがされているのに反し、彼は戦争に反対しつつも止むなく従軍する敬虔で誠実な正義の士として描かれている。ところでこのアムピアラーオスに劣らぬ好意的な賞讃を將軍たちに与えているのがエウリピデースの「救いを求める女たち」におけるアルゴス王アドラストスなのである。アドラストスは攻囲軍でただ一人死を免がれたが、仲間の戦死した將軍の

遺体引取りと埋葬を勝ったテーバイ側が許さないのも、その戦死者たちの老母たちと共に、アテーナイのテーセウスの許へ遺体奪還の応援を乞いに嘆願者としてやって来る。そしてアテーナイの援助により戦いに勝ち遺骸を取り戻した後で、アドラストスはテーセウスの間に答えて遺体を指し示し、口を極めて味方の将軍たちの高潔な人格を賞め讃える。この場面は上記の劇の戦闘場面の記述とはアムピアラースの場合を除いて好対照をなしているのも、その比較のためにも概略を以下にまとめておこう。

第一にカパネウスはゼウスの稲妻に打たれて死んだが、彼は多くの富にも傲る *gauros* ことなく、思い上ること *phronema* が無い点で貧者に劣らない。儉約を顧みずに贅沢な食事をしている者を避け、口腹の楽しみを無益となし、中庸で足れりとする。友人に対しては在不在にかかわらず真実であり、性質には偽りがなく、ことばは礼儀正しい。市民と奴隷の別なく実を尽くす人物である。

第二にエテオクロスは、若者であるために財産には不足していたが、アルゴスの地では大きな名声を博していた。彼に金を与えようという友はしばしばいたが、それを家の中に迎えなかったのは、金銭に縛られた奴隷のような生き方を望まなかったからである。悪事を行う者 *eksamartanontes* を憎んでも、その国を憎まなかったのは、悪しき為政者の為に評判が悪いことの責任は国に無いからである。

第三にヒッポメドーンの人柄については、幼時よりミューズの快樂と軟弱な生活を斥けることに意を用い、山野に住まい、厳格な風に身を委ね、武を尚んだ。野に馬を駈り、弓を射、国に有為の身体を捧げんと望んでいた。

第四に女狩人アタランテーの息子パルテノパイオスは容姿に秀で、アルカディアの生れながらアルゴスに育ち、居留外国人の分を弁えて事を構えず、国にも意趣を含まず、言葉を控え慎しんだ。部隊を任せられてはアルゴス人の如く国土を守り、国が栄えれば喜び、衰える時には悲しんだ。男も女も等しく彼を愛する者は多かったが、心して過まちを犯すこと *eksamartein* はなかった。

第五にチューデウスは、弁舌においては輝かしくはないが、楯の術においては練達の士で工夫の才に富み、判断力において兄弟のメレアグロスに譲るとも、槍を揮っては名声それに劣らず、楯に妙なる楽の音を響かせた。名誉を重んじて、言葉によらず行為において誇り *phronema* 高い人物であった。(Supp.857-908)

以上のようにアドラストスの描写は葬送演説のスタイルで故人の品性と業績を最大級の讃辞で美化している。他の場面では手厳しく批判されているチューデウスやカパネウスで

すらここでは聖人のように讃えられている。とりわけ注目すべき点は、戦闘場面においては将軍たちの傲慢不遜な粗野な性格として表現されたものが、ここでは彼らの美点として用いられていることである。敵を攻める勇気、祖国を守る気概、武器を執る業はすべて味方にとって美徳となる。その同じ美徳が敵にとっては反対に悪徳ともなり得るのは当然であるから、むしろアイスキュロスの劇でアムピラーオスが味方のテューデウスやポリュネイケースを罵ることの方が特異であろう。それが原因か或いは後の二人の遺体が無いためか、アドラストスは以上の五人で讃辞を打ち切り、それをテーセウスが引き継いでアムピラーオスとポリュネイケースを手短かに讃めるが、それは上のスタイルとは全く異った簡略なものである。「オイクレースの気高い子(アムピラーオス)を、神々は生きながら戦車もろ共に大地の奥津城へと奪い去ったが、それは明らかに彼への賞讃である。オイディプースの息子ポリュネイケースは、私が賞めても偽りにはなるまい。彼はカドモスの都を去って亡命者として自ら進んでアルゴスに渡る前に私の客人であったから。」(Supp.925-931)

まとめ

ソポクレスの『アンティゴネー』の中でコロスはテーバイの攻防戦について次のように歌う。「七つの城門を攻める七人の将軍が同じ数の敵に対して立ち向い、勝利をもたらすゼウスに残した。青銅造りの捧げ物を、惨めな二人の兄弟を除いては。同じ父母から生まれながら相討ちの槍を互いに向けて揮い、共倒れの運命を分け合った、二人して」(Antigone 141-147)。

この劇では次のアンティゴネーによるポリュネイケースの埋葬が主題となるためにこのように手短かに語られる事件を、劇の中心に置いて描いた場合の扱い方を対比して上に述べた。

半世紀を隔てて上演される二つの劇の間には、同じ事件を主題にしながらかつその扱い方にはかなりの違いがある。その最大のもはエウリピデースがイオカステを生き永らえさせて、兄弟相討ちの悲劇を防ぐための虚しい説得をさせている点である。その他にも登場人物を増やしたり場面展開を複雑にしたりして、劇に新しい解釈や趣向を加えてはいるが、変えられていない重要な部分がある。それは七つの城門を攻める七人の将軍を順に紹介しながら、彼らの性格を彼らの武具の特徴、とりわけ楯の紋章によって示そうとする手法である。それは古代文学の特徴の一つとはいえ、アイスキュロスが『テーバイに向う七将』

においてあまりにも徹底して行ったために、エウリピデースもそれを簡略に扱う努力はしながらも遂にその影響から脱し切れなかったからだと言えるかもしれない。

しかし他面ではこの手法以外に将軍たちの性格づけをする方法がなかったともいえる。ポリュネイケースを除いた将軍たちは悲劇伝承の中ではマイナーな人物であり、彼らが主人公となるのでなければ断片的な一面的な性格描写しかできない。その時には、彼らの勇猛ぶりを表わそうとすれば防御する側から見て傲慢不遜に映るのも無理の無いことである。アムピアラースを正義の人とし、ポリュネイケースにはエテオクレースと同じように王位要求の権利を認めるならば、他の五人には等しく高慢で尊大な性格を与える以外に選択の余地は残されていない。その際彼らが討死する運命を、彼らの性格が招いた神々の罰による必然の結果であるとするためには、ギリシア悲劇の公式である「傲慢 *hybris*→神の怒り *nemesis*」にあてはめて描写することも自然な方法である⁽¹²⁾。

「ゼウスは大口を叩く者の大言壮語 *kompos* を甚だしく憎まれる。そして彼らが大軍勢で黄金の響きを高らかに鳴らして攻め寄せて来るのを見ると、堡壘の頂上で勝ち鬨を挙げようとする者に対して炎の槍を投げつけ給う」(Antigone 128-134)。

上のようにコロスは歌っているが、攻撃軍の将軍の勇猛果敢が「大言壮語 *kompos*」で表わされ、それが「傲慢 *hybris*」と受け取られて神々の憎しみを受け、その罰として無残な死を遂げる、という図式は基本的には三人の作家において共通である。その場合将軍たちの性格を比喩的に象徴する手段として楯の紋様に着目し、それを描写する場面に主力を注いだのがアイスキュロスであり、その手法を取入れながらも場面を分けて描写し、筋の展開に動きを与えたのがエウリピデースであると結論できるだろう。

註

- (1) 池田論文、『テーバイに向う七将』の技巧、『エポス』第五号、pp.38-53。(1981)
- (2) この伝承変改については、池田論文、『テーバイに向う七将』と『フェニキアの女たち』の対比、ペディラヴィムウ 第26号、p.1ff.(1987) 参照。
- (3) 『テーバイを攻める七人の将軍』という論文の題名は、アイスキュロスの『テーバイに向う七将』との混同を避けるためである。ここではテーバイ攻防戦におけるアルゴス側の将軍の性格描写と楯の紋様との関係を比較しているのである。
- (4) エウリピデースの時代を取りまく知的環境の変化については、J.Ferguson, *A Companion to Greek Tragedy*, p.236ff. 参照。
- (5) "Phoenissae" の hypothesis には次のように記されている。「劇には登場人物が多く、また多くの美しい思想に満ちている。劇は、たとえ補足的ではあっても、舞台上の見せ場 *opsis* によって良くできている。またアンティゴネーが城壁の上から眺めている部分は劇にそぐわないし、ポリュネイケースの休戦条約は無益であり、とりわけ冗舌な歌と共に追放されるオイディプースは無駄な補強である。」H.D.F. Kitto はこの批評の正しさを認めて *Phoenissae* の登場人物は11名以上であり、「物見 *Teichoskopia*」、「*Polyneices* の訪問」「*Exodus*」を後の挿入と見る者もいると言っている。Kitto, *Greek Tragedy* 352
- (6) S.A. Barlow はこの楯の描写に関して、アイスキュロスは将軍たちの性格と感情を(客観的に)絵画的に叙述するのに反し、エウリピデースの場合はアンティゴネーの偏見に従って(主観的に)描いていると区別している、Barlow, *The Imagery of Euripides*, pp. 57-58。
- (7) O. Taplin は「持物と象徴」の関係について、「持物はその(所有者の)役割、地位、生き方を具体的に表わし、時には人物以上の連想を表わすことがある」と言っている。Taplin, *Greek Tragedy in Action*, p.77.
- (8) Statius の *Thebaid*, i, 482ff. では、ポリュネイケースが獅子の毛皮を、テューデウスがリュドーンの猪の毛皮を持っている。
- (9) この使者の報告、エテオクレースの応答、コロスの祈りの *symmetrical* な組合せを、R.P. Winnington-Ingram は "Redepaare" と呼び、「偉大な精神の反響である」という Longinus のことばを引用している。
R.P. Winnington-Ingram, *Studies in Aeschylus*, p.16, p.23.

(10) エテオクレースの指示と共に舞台に居た六人の勇士が次々と各城門に派遣されると
いう観方が支配的であるが、O. Taplin はこの演出方法を否定する。

O. Taplin, *The Stagecraft of Aeschylus*, pp. 146-156

(11) 池田論文、註1 参照。ここで論じたことを繰り返さないために、要点のみを分り易く
一覧表にする。

(12) 「正義 dike、傲慢 hybris、神の怒り nemesis」の関係については、B. Vickers, *Towards Greek
Tragedy*, pp.23-33

『オイディプース王』に代表される「テーバイ叙事詩圏」は、『イーリアス』に代表される「トロイア叙事詩圏」と並んで、ギリシア文学に豊かな神話伝説の素材を提供している。この一方の「テーバイ叙事詩圏」は、カドモスを祖とするテーバイ王家にまつわる一群の物語りから成っていて、これから論じようとする『テーバイに向う七将』はその王家の一族の間の王位をめぐる争いについての物語りである。この論文では便宜上テーバイ王家にまつわる物語りを「テーバイ物語」⁽¹⁾と呼ぶことにする。

アイスキュロスの『テーバイを攻める七人の将軍』はこの「テーバイ物語」から取材した悲劇であるが、現存の悲劇作品の中にはこの物語の一部を主題にした作品として、ソポクレスの『アンティゴネー』、『オイディプース王』、『コロノスのオイディプース』があり、またエウリピデースの『救いを求める女たち』と『フェニキアの女たち』がある。これらの諸作品の中でも特に『フェニキアの女たち』は『テーバイに向う七将』とほぼ同じような題材を扱っているので、この二作品を中心にその構成と問題点を対比して論じてみようと思う。その際に比較研究の良い手がかりとなると考えられるのは両作品のテキストに添えられた「hypothesis 前書き」⁽²⁾である。

この前書きは現存の悲劇の写本の大部分に附いており、ある作品には数種類、特に『テーバイに向う七将』には六種類もの前書きが伝えられている。これらは本来アリストテレスの弟子のディカイアルコスや、ビザンティウムのアリストパネース(前 257 年頃～180 年)などの学者の手によるものとされる。この前書きは didasalia と呼ばれる劇上演の記録と作品の梗概、批評の部分から成り、それらが完全に伝えられていれば作品上演年代の決定や作品研究の上で非常に重要な資料となる筈のものであるが、現在に伝わる前書きにはその原型を保つものは殆んど無く、代りに中世の文法学者たちが書き加えた冗長な解説や初歩的な註釈が大部分であり、作品の研究には無価値なものが多いとされている⁽³⁾。しかしこれらの資料的価値が少ないとされている前書きも、注意深く読んでいくと、作品研究の緒となる何らかの手掛りが得られることがある。そういう発見を期待して『テーバイに向う七将』⁽⁴⁾と『フェニキアの女たち』の比較研究のために、まずその両作品の前書きを詳しく読んでみようと思う。

ところで G.Zuntz⁽⁵⁾ は現存の hypothesis を次の三種類に分類している。その第一は、

ビザンティウムのアリストパネースが書いた前書きの原型を不完全ではあってもほぼ保っていると思われるものである。これらには当時のアレクサンドリアの図書館で得られる限りの作品に関する情報が精緻で簡潔な表現で記されている。第二の種類はこれとは対極的なもので、中世のビザンツ帝国の文法学者、特に Thomas Magister らが書いたとされているものであり、それは作品の詳細な解説、神話伝説の冗慢な物語、文法的に緩慢な文体と特異な用語、ギリシャ文学の初歩的な知識をも欠いている読者を対象にした説明という特徴で際立っている。第三の種類はこの中間の性質を備えたものであり、アレクサンドリアの文献学者の該博な知識と簡明な文体を持ち合わせぬ代りに、中世の文法学者の欠点からも免れている。その主目的は劇の内容を要約することで、登場人物や筋書の簡単な紹介に止まり、それは作品のダイジェスト版としての役割を果たしていたのではないかと考えられる。

さてこの三つのグループのそれぞれに幾つかの前書きが実例として挙げられているが⁽⁶⁾、興味深いことに、『テーバイに向う七将』の「前書きの一」が分類の第一に属し、それ以外のもの特に「前書きの三」が第二に分類され、また『フェニキアの女たち』の「前書きの一」が第三の分類に区別されているということである。

この事実は両作品の比較研究にまことに好都合なので、この分類の観点から考察を進めて行こうと思うが、その際にもう一つの考察の対象も付け加えたい。それは『フェニキアの女たち』の「プロローグ」が劇の背景を詳細に説明していて、その内容がほぼ第二の分類の前書きに等しいということである。これは実際は第二の分類の前書きが資料としてこのプロローグを用いていることから生じた結果であって、それは文体表現から容易に確められることであり何の不思議もない。問題はむしろエウリピデースが、中世の古典の知識に乏しい読者を念頭に置いた前書きのような、長々しい神話の背景の説明を、前五世紀末葉の観客に向ってしていることにある。当時の観客の知識水準はそのような程度にまで落ちていたのだろうか。それとも改めてこの有名な「テーバイ物語」をイオカステに長々と説明させたことには、作者の何らかの意図が隠されているのだろうか。これらの関心を持って両作品の前書きと『フェニキアの女たち』のプロローグを検討してみよう。

—
最初に第一の分類のアリストパネースの書いた原型をかなり良く保っている例とされるアイスキュロス作『テーバイに向う七将』の「前書きの一」(I Septem と略す)を記す。〈劇

の舞台はテーバイに設定されている。コロスにテーバイの乙女たちから成る。主題はテーバイ人を攻囲するアルゴス人の軍隊とまた勝利者たるテーバイ人、そしてエテオクレスとポリュネイケースとの死である。(この劇は)テアゲネースが(アルコーンの年)、第 78 オリュンピア紀(前 468/7 年)に上演された。(アイスキュロスは)『ラーイオス』『オイディプース』『テーバイに向う七将』とサテュロス劇『スピックス』によって優勝した。二等はアリストイアースが『ペルセース』『タンタロス』(アンタイオス?)と父親ブラーティナースの作であるサテュロス劇『力士』によって、三等はポリュフラスモーンが『リュクールゴス四部作』によって得た。)

二

次に第三の分類の中間グループの例として挙げられる、エウリピデース作『フェニキアの女たち』の「前書きの一」(I Phoenissae と略す)を記す。(エテオクレスはテーバイの王位を受け継ぐと弟のポリュネイケースからその分け前を奪った。彼は亡命者としてアルゴスに行き、祖国に帰ることを切望しながら王アドラストスの娘と結婚した。そして義父を説きつけてテーバイの兄に向けて相当な大軍を集めた。だが母親のイオカステは、休戦条約の下に都に来て先ず支配権に関して兄と協議するようにと彼を説得した。だがエテオクレスが王権に関して頑なな態度を取ったのでイオカステは子供たちを和解に導くことができず、ポリュネイケースは今後敵として対陣するべく都を去った。

テイレシアースは、もしクレオーンの息子のメノイケウスがアレースに対して犠牲となるならばテーバイ人側に勝利があるだろうと予言した。クレオーンは息子を国の為差し出すことを拒否したが、若者は父親が彼に金を与えて逃亡を勧めたにもかかわらず自らの死を望んで、その上にそれを実行した。テーバイ人はアルゴス人の将軍たちを殺した。エテオクレスとポリュネイケースは一騎討ちをして互いに殺し合った。ところで彼らの母親は遺体となった息子たちを見出して自害したが、彼女の兄弟のクレオーンは王位を受け継いだ。アルゴス人たちは戦いに敗れて引き揚げた。だがクレオーンはカドメイア(テーバイの城砦)の下で倒れていた敵を憎んで埋葬を許さず、ポリュネイケースを葬らぬまま投げ棄て、オイディプースを祖国から亡命者として追い出し、彼らに対して人間の法を守らず、彼らについて立腹の理由を捧え上げてその不幸を憐れむこともしなかった。)

上の二つを見るとまず説明がそれぞれの劇の内容に止められて、それ以上の背景や伝承にまで及んでいないことに気がつく。もちろん前者が hypothesis の典型として解説は禁欲

的なまでに抑えられ、上演資料の部分が充実しており、後者はあくまでも作品紹介として梗概の解説に終始しているという際立った特徴を備えていることは歴然としている。

解説の範囲がその対象となる劇の内容に限定されているか否かという点が、上の二つの前書きと、これから述べようとする「前書きの三」ならびに「プロローグ」との大きな違いである。

三

『テーバイを攻める七人の将軍』の「前書きの三」(III Septem と略す)は第二のグループに分類されて、中世の文法学者が徒らに博識を誇って加えた余計な説明や註釈が目立つが、その最大の特徴は「テーバイ物語」全体にわたる冗長な解説である。この劇は『ラーイオス』『オイディプース』の次に位置して、サテュロス劇『スピックス』を加えて四部作を構成する作品の前書きなので、本来ならばこのような説明は不必要である筈なのだが、これが書かれた時には他の作品が失われていたためだろう。

ラーイオスはラプダコスの息子であり、テーバイに君臨し、メノイケウスの娘イオカステを妻として娶っていたが、ペロプスの呪いを恐れていたため、彼女と床を共にして子供を得る勇気が無かった。言い伝えによれば、ペロプスの息子のクリューシッポスはオイノマーオスの娘ヒッポダメイアからではなく別の妻から(生まれた)のであったが、ラーイオスは彼を愛して連れ去り共に寝て、人間の中で始めて同性愛の手本を示した。それは神々の間でゼウスが、ガニューメーデースを奪い去ってそうしたのと同じである。ペロプスはこれを知ると、ラーイオスが自分の子供によって殺されるように呪った。ともかくラーイオスは上に述べた事情からすでに盛りを過ぎても子供が無く、子を持つべきか否かを問おうとしてアポローンの神託所を訪れた。

(神は)彼に神託を与えた。「神々に背いて、子供(を作る)敵に種を蒔いてはならない」。彼はその神託を受けて帰り、自分の妻と寝床を共にしないように用心した。だがそういうある日、彼は酒に酔って妻と寝て彼女からオイディプースを得た。ペロプスも呪ったように「もし子供を持つならば、その息子は汝を殺すであろう」と告げた神託を恐れて、彼はオイディプースが生まれた時にその両足を通して黄金の環を貫きとめて、その子をキタイローンの(山中に)棄てた。その彼を或る羊飼いたちが発見して拾い上げ、当時コリントスを治めていたポリュポスのもとへ連れ帰った。王は彼を受け取って世話をするのに値するものと考え成人するまで育てた。

その後オイディプスは或る男に侮辱され彼が私生子であってポリュボスの嫡出子でないといふと非難されたので、彼は自分が何者であり誰の子であるのかを伺うためにデルポイのアポローンの神託所に詣でた。神託は彼に答えた。「汝には汝の父を殺し汝の母と寝床を共にすることが定められている。」彼は神託を聞くとそのお告げの故にコリントスのポリュボスの許に帰ることを止めた。ポリュボスその人を神託が父と呼びその妻を母と言っているものと思い込んだからである。そして彼はテーバイに向う道を行った。彼がその道を進んでゆくと父親のラーイオスもまた自分の棄てた子供が、つまりそれはオイディプスのことであったが、どうなったかを知ろうと神託を伺うためにやって来るところであった。両人が出会った時、ラーイオスの護衛たちが「おい他處者よ、王様に道を譲れ」と言ったが、彼はそれに従わなかった。彼はラーイオスによって打たれると彼に対して腹を立て、彼とその従者を全て殺したが、ただ一人の男を放免してやり、その男は逃げ帰ってすべてを報告した。

オイディプスが後にテーバイにやってくると、彼はその国の上に大きな災厄が迫っていることを知った。それはスピックスであった。スピックスは謎を語って、それを解く力の無い者を貧り喰っていたのである。当時テーバイ人たちからスピックスの謎(の答えを)見出した者に対して、ラーイオスの妃のイオカステが褒賞として、その者に妻として与えられることが布告されていた。そこでスピックスが謎を言った。「四本足、二本足、そして再び三本足(のものは何か)?」それは人間を意味したが、オイディプスはそれが分かった。スピックスは怒り狂って自殺した。

ところでオイディプスは自分の母と床を共にして、ポリュネイケース、エテオクレース、アンティゴネー、イスメーネーの四人の子をなした。後になって自分の犯した不法行為を知り自らを盲いにして、先に述べた自分の息子たちに王位を譲った。この息子たちはこの盲目の人を小部屋に押し込めたので、彼は彼らが王国を剣で分け合うようにと呪った。この為には彼らは一緒にテーバイに住んで王位に就くことを恐れて止めた。そして一方が国を出て外国に行きしばらくの間他方が王位に就く、そして再び外国に居る方が帰国すると他方が退位するという取決めをして、このようにして呪いを逃れようとした。ともかくポリュネイケースが最初にしばらく王国を治めた、それからエテオクレースに位を譲って外国に行った。時が満ちるとポリュネイケースは取決めに従って王位に就くために再びテーバイに帰って来た。しかしエテオクレースから王位を継承することができずに、アルゴスの王アドラストスの許に行き、彼の娘の婿となった。それ故彼はアルゴスから大軍を得る

と自分の兄弟に向かってテーバイへと出発した。そこで彼とその兄弟とは互いに殺し合った。

劇の舞台はテーバイに設定されている。コロスはテーバイの娘たちから成る。主題はアルゴス人の軍隊がテーバイ人を攻囲して勝利を収めたことと、エテオクレスとポリュネイケースとの死である。『テーバイに於ける七将』⁽⁷⁾という標題は、七人の将軍がテーバイの城門を守ることから付けられた。そのテーバイは七つの城門を持っているが、エジプトにある(テーバイ)⁽⁸⁾は百の城門を持っている。)

四

『テーバイを攻める七人の将軍』に付けられた「前書きの一～六」(I～VI Septem と略す)の中、II～VIの概要は右とほぼ変りはないが、IV Septem はエテオクレスがポリュネイケースより年上なので最初に治めたこと、ソポクレスはその逆だと言っていることに言及している。更にテーバイの七つの城門を攻撃する将軍の名についてアイスキュロスとエウリピデースに違いがあることを指摘して著者が三人の作家を視野の中に収めていることを明らかにしている。更にこの劇の標題について『テーバイに於ける七将』と記してそれはテーバイの城門を守る七人の将軍と解しているが(II,III,VI Septem)特に V は七つの城門に両軍からそれぞれ七人の将軍が配備されているからだと説明している。事実はそのように違いはないのだが、この劇を攻撃側に重きを置いて見るか、守備側に立って見るかの態度の違いが表われているようで興味深い。

更に重要なのは「スピックスの謎」の扱い方である。これはラーイオスの話とオイディプースの話をつなぐ大事なエピソードであり、これが無くては話がつながらないのだが、その謎の紹介の仕方が前書きによって異なるのである。それを次に記す。

〈そこでスピックスは「地上に二本足のものが居る」と謎を言うと、それが人間を意味することは君も知っているが、オイディプースはそれが分った。スピックスは怒り狂って自殺した。〉(II Septem)

〈そこでスピックスが謎を言った。「四本足、二本足、そして再び三本足(のものは何か)?」それは人間を意味したがオイディプースはそれが分った。スピックスは怒り狂って自殺した。〉(III Septem)

〈スピックスが次のような謎を言うとオイディプースが解いた。その謎は次のようであった。「地の上に姿は一つでありながら、二本足、四本足、また三本足のものがある。地の上を這うもの、空の上、海の下にあるものは大きさを変えるのみ。しかし彼が余分な足

に縋って歩くのは、その手足の力が萎えた時。」

この謎の解答をオイディプスは次のように言ったと伝えられている。「聞け、たとえ望まぬとも、邪しき翼持てる死者のムーサよ。我が声を、それは汝の罪の終りなり。汝の語れるは人間なり、彼が地の上を這いたるは、母胎より生まれしばかりの四つ足の幼児の時、しかし年老いて三番目の足なる杖に縋るのは、老齢に背を曲げて首の重さを支うる時。」するとスピックスは怒り狂って自殺した。〉(VI Septem)

簡潔さを尊ぶ本来の前書きの精神から言えばオイディプスが謎を解いてテーバイを災から救ったことさえ記せば充分なはずなのだが(V Septem のように)、上に記した他の前書には謎の内容を詳しく紹介して博識ぶりを示している。

五

この「前書き」と同じタイプに属する『フェニキアの女たち』の前書きには、「物語の始めから劇に至るまでの包括的な概観」というタイトルが Thomas Magister によって付けられているが⁽⁹⁾、その意味では(III Septem)の記述は包括的とは言い難い。「テーバイ物語り」の重要なエピソードとその本質的なテーマを幾つか閑却しているし、不必要な細部に重点を置いている部分があるからである。彼がどういう所に力点を置いているかを知る為にも、現在知られている限りの「テーバイ物語」を概観してみよう。

古代の作家が記したギリシャ神話伝説の記述の中で、そのテキストが現在にまで伝わっているものをまとめて物語毎に解説した R. Y. Hathorn の著書⁽¹⁰⁾があるが、その「テーバイ物語」の章の各項目の内容を中心に物語を次に要約する。

〈1、カドモスの旅。シリアのテュロスの王アゲーノールが娘エウローペーを失った時三人の息子カドモスとポイニクス、キリクスに娘を探すように命じた。彼はデルポイで神託を受けて月の印をつけた牝牛の後についてテーバイに来て、その地で竜を退治した。アテーナーに教えられてその竜の歯を地に蒔くと戦士が現われて戦ったが、生残った五人を従えてテーバイの王家の祖となった。その戦士の子孫は竜の歯形の斑文を背に持っていた。〉

〈2、カドモスとハルモニア。カドモスはアレースとアプロディーテーの娘ハルモニアを妻としテーバイの岩カドメイアに住んだ。その結婚式に神々が様々な贈物をしたがその中にヘーパイストスが贈った長衣と首飾があった。これは彼が妻の浮気によって生まれた娘を憎んだための贈物であったが、これが代々にわたってカドモスの一族の上に災をもたらすことになった。またカドモスの娘のイーノー、セメレー、アガウエーも、孫のアク

タイオン、ペンテウスも不幸な結末を迎える。〉

〈3、ラーイオス。彼はカドモスの孫ラダゴスの息子であったが、国を追われてペロプスの許にあった時にペロプスの息子クリューシッポスに恋して彼を誘拐した。この事件により彼は同性愛を行った最初の人とされ、ペロプスは彼が自分の息子によって殺されるように呪った。ヘーラーもこれに怒ってその呪いがデルポイの神託によって確実になるように計った。ラーイオスはイオカステと結婚しても神託を恐れて妻と床を共にしなかったが、ある時酒に酔ってその戒めを忘れ一子を得た。その子供は足に鉄串を通してキタイローンの山中に棄てたが、或る羊飼いが拾い、その子はコリントスに連れて行かれて王ポリュボスによって育てられた。彼は足が腫れていたことからオイディプースと呼ばれた。〉

〈4、オイディプースと神託。オイディプースはコリントス王家の王子として育てられたが、或る時宴席で私生子であると罵しられて悩み、真実を知る為にデルポイに行くが、そこで「父を殺し母と結婚する」という予言を聞かされコリントスに帰らぬ決心をする。彼がテーバイに向う三叉路に差し掛ると、老人の乗った車と出合い、道を譲らぬことで争いとなり、老人に打たれた彼は怒って老人と護衛の者を一人除いて皆殺しにした。だが実はその老人こそ父親のラーイオスで、神託を逃れようとした彼はそれを実現したのであった。〉

〈5、オイディプースとスピックス。オイディプースがテーバイにやって来ると、その都はラーイオスの罪を罰する為にヘーラーが遣わしたスピックスの災いに苦しめられていた。その怪物は謎に答えることができない人々を貧り喰っていたのだが、オイディプースがその謎を解くと怪物は死んでしまう。オイディプースは都の解放者として迎えられ死んだラーイオスの代りに王位に就きイオカステを妃とする。〉

〈6、オイディプース王。王と妃の間にポリュネイケースとエテオクレースの兄弟とアンティゴネーとイスメーネーの姉妹が生まれた。その後テーバイを疫病が襲ったので、王はクレオンをデルポイに遣わし神意を問うと、ラーイオス王殺害の犯人が罰されないことが原因だという託宣を受ける。そこで予言者テイレシアースを呼び出して犯人の追究を命じるが、真実を知る彼は犯人を教えることを拒む。王の責任を果そうとするオイディプースになじられて怒った予言者は、王自身が先王殺害の犯人であると叫んで立去る。身に覚えのない非難に激怒したオイディプースは、これをクレオンの陰謀と思い込んで彼を呼び寄せて糾弾するが、その過程で次々に隠された事実が明るみに出される。デルポイの神託が全て果されたことを知った妃は王宮に駆け込んで縊死し、後を追ったオイディプース

は彼女のブローチで自分の眼を突いて盲目になる。〉

〈7、テーバイに向う七将。オイディプースが娘アンティゴネーに伴われてテーバイを去った後、クレオンが国を治める。二人の兄弟は成人すると互いに王位を争い、一年交代で王位に就くことを取決めて先にポリュネイケースが王となる。一年の期限が過ぎると彼はエテオクレスに地位を譲るが、その際財宝と共にハルモニアの長衣と首飾を持ち去る。そしてエテオクレスは次の期限が来ても王座から降りようとししない。怒ったポリュネイケースがアルゴスにやって来ると、王アドラストスの王宮の前でたまたま出会ったテューデウスと争うが、その二人が神託に予言された猪と獅子であると解した王によって彼らはその娘たちの婿とされる。王の助けを得た彼らは他の五人の将軍と共に復権を要求して七つの城門を持つテーバイを攻める。〉

〈8、コロノスのオイディプース。アルゴス勢がテーバイに向けて進軍しようとしていた頃、オイディプースはアッティカのコロノスに来ていた。知らずにエリーニュスの神域に入りこんだ父娘は土地の人に追い出されそうになったが、そこがアポローンの神託に予言された終焉の地であると悟ったオイディプースはその地に止まる許可を嘆願し、人々は裁決を求めてテーセウスを迎えに使いを送る。そこにイスメーネーが現われて、二人の兄弟が王位をめぐる争っていること、そしてどちらかの勝利の為に彼の存在が必要なことを知らせる。続いてクレオンが来てテーバイの勝利の為に彼の帰国を求めるが、断わられて二人の娘を連れ去ろうとする。するとオイディプースに保護を約束したテーセウスが現われて彼らを救う。更にポリュネイケースも来て父の助力を求めるが、彼はそれを拒否し二人の息子が互いに殺し合うように呪う。そしてテーセウスの見守る前で地下に降り、アッティカの守護者となる。〉

〈9、七将の敗北。アルゴス軍がテーバイを包囲すると、譲位を説得する使者としてテューデウスが単身入城したが、エテオクレスが従わなかったので、皆に一騎討を挑み全て勝った。それを恨んでテーバイ人が彼を待伏せると、彼は一人を除いて全てを殺した。戦闘が開始されアルゴス勢が猛攻を加え、テーバイ人がテイレシアースの意見を求めると、彼はもしクレオンの子メノイケウスが犠牲になればテーバイは勝つと答えた。クレオンは息子を逃がそうとするが、彼は自ら城壁の上で命を断って国の犠牲になる。七人の将軍はそれぞれ討死して、アムピアラオスはゼウスの雷に打たれ地下に呑み込まれる。エテオクレスとポリュネイケースは両軍の決議により一騎討をすることになり、両者は相討の死を遂げる。アルゴス勢は総崩れになりアドラストスは辛うじて逃げ帰る。〉

〈10、アンティゴネー。クレオーンは祖国に反逆したポリュネイケースとその仲間の遺体の埋葬を許さず番人を立てて見張ったが、アンティゴネーは兄の死体を葬ろうとして捕えられ許婚者ハイモーンのとりなしにも関らず地下牢に入れられる。そこにテイレスアースが現れて占いの結果を告げ遺体を埋葬して穢れを祓うよう忠告するがクレオーンは聞こうとしない。しかし思い直してアンティゴネーを許そうとすると、既に遅く彼女は縊死しており、ハイモーンも後を追って自殺する。悲嘆にくれるクレオーンに王妃もまた自殺したとの報せが伝えられる。〉

これに続いて七将の子供たちであるエピゴノイとテーバイとの戦い、アムピアラースの息子とアルクマイオンが父の仇を討って母親を殺しエリーニュスに追われる話があり、これにはハルモニアーの長衣と首飾が大きな役割を果たしている。「テーバイ物語」とその悲劇は、いわばハルモニアーの首飾の呪いによって終始しているのである。だが『テーバイに向う七将』と『フェニキアの女たち』の物語は右の第十番目のエピソードまでで終わっている。それではここで『フェニキアの女たち』のプロローグを概観してその内容を検討しよう。

六・一

エウリピデースの『フェニキアの女たち』の特徴はその前書きに巧みに要約されているように、イオカステがオイディプスの死後も生き永らえて⁽¹¹⁾、王位をめぐる争い合う二人の兄弟を仲直りさせようとして執り成しをするところにある。しかし彼女の努力は失敗に終わり、クレオーンの息子のメノイケウスが祖国を救うために進んで我が身を犠牲に供し、イオカステは相討ちで倒れた兄弟の遺害の上で自害して果てるという筋になっている。このような重要な役割を与えられたイオカステは、プロローグにおいて「テーバイ物語」を始めからこの劇に至るまで総括して述べるという特異な導入をする。一般にプロローグというものはその劇の場面の背景や登場人物の簡単な説明をすることを目的にしているものなのだが、この劇のプロローグのように神話物語の発端から主要事件を細大余さず概観してみせるというのは余り例が無い。先に挙げた「テーバイ物語」の基本的な概略と項目ごとに照らし合わせて、このプロローグの特徴とその意味を探ってみよう。(同じ番号で同じ項目を示す)。

「①、おお星空に道を切り拓き、黄金をちりばめた車に打ち乗って、駿馬によって光焰を駆け廻らす太陽よ、なんという不運な光を彼の日にテーバイに投げかけられたことでし

ょう。カドモスがこの地に、海沿いのフェニキアの国を後にして、やって来た時に!」(Ph.1-6)とイオカステーは冒頭から嘆き声を挙げる。ここで述べられているのはテーバイの建国の祖カドモスがギリシアに移住したことそのものが不幸の始まりだという考えである。ここでは「テーバイ物語」の第一のエピソードの中の竜退治の話などは省略して、すぐ次にカドモスの結婚とラーイオスに至る彼の一族の系譜に話に移る。

「②、彼はキュプリス(アプロディーテー)の娘ハルモニアーをめとり、ポリュドーロスを儲け、それからラブダコスが生まれ、その子がラーイオスであると言われています。」(Ph.7-9)「テーバイ物語の2」ではハルモニアーの贈物がカドモス王家の不幸の第一原因なのであるが、ここではハルモニアーとの結婚と一族のラーイオスに至る系譜が簡単に述べられているだけである。しかしこの結婚がテーバイの不幸と関連して述べられている点は軽視できないだろう。

それから彼女は自分とラーイオスの結婚に話を移す。「③、私はメノイケウスの娘と呼ばれております、クレオンは同じ母から生まれた兄弟で、私は名をイオカステーと申しますが、父がこの名をつけました。ラーイオスは私を娶り、私と永年床を共にしながら家に子供が無いので、ポイボスに神託を伺いに行き、同時に男児が家に授かるようにと願いました。御神は告げました。『おお、馬に富むテーバイの王よ、神々の意に背いて子供(を作る)畝に種を蒔いてはならない。もし子供ができるなら、その息子が汝を殺すであろうから、そして汝の家は全て血の中を歩むことになろうからである』」(Ph.10-20)。この箇処でイオカステーが自分を紹介する部分以外は、アイスキュロスの劇の前書き(II,III,V,VI Sptem)に共通なエピソードであり、神託の表現も全く同一であるから、前書きはこのプロローグのことは手本にしたものと思われる。しかし(III,VI Septem)のクリーシッポス誘拐とその行為に対する「ペロプスの呪い」への言及がここでは欠けている。「テーバイ物語」においては「ペロプスの呪い」がオイディプスの悲劇を生む原因になるのであるから、その点で神話を全て振り返ろうとする『七将』の前書きとは幾分視点が異っている。

さてオイディプスが生まれた経緯についてイオカステーはこう語る。「(ラーイオス)は快楽に身をまかせ、酒に酔って私たちの子を儲け、子供ができると誤ちに気づき神託を(思い出し)ヘーラの牧場なるキタイローンの岩山に赤子を棄てるようにと牧人に与えました、そのくるぶしの真中を鉄串で貫いたので、その子をヘラスの人々はオイディプス(腫れた足)と呼んだのです。」(Ph.21-27)この記述は「テーバイ物語の3」や、「七将」の前書き全てに共通のもので、ラーイオスが酒に酔って神託を忘れて子供を儲ける点におい

て変りはない。しかし彼のその行為が「誤ち *amplakema*」と表現されていることでこの部分は他の全ての記述とは異なっている。このことばは、「*hamartia*」と同様に「誤ち、失敗、罪」を表わしているがその用法はもっと限られている。ここではこの特異なことばが、ラーイオスの行為を性格づけるために、この劇においてのみその冒頭において、しかもイオカステの口を通して語られていることに注意を促して、そのことばの検討は後の章で行うことにする。

次にオイディプスの父王殺害についてはこう語る。「④、その子をポリュボスの馬飼いが拾い上げ、家に連れ帰って女主人の腕の中に置きました。彼女は私の腹を痛めた子に乳房を含ませ、その子を自分が生んだのだと夫に説きつけたのです。既に私の息子が顎も髭で黄ばんだ頃、自分で気づいたか誰かに聞いたかして、生みの親のことを詳しく知ろうと望んで、ポイボスの宮に行きました。

私の夫のラーイオスもまた、棄てた子供がもはやこの世に居ぬものかどうかと熱心に知ろうとしました。そして二人はポーキスの道が分かれるところで出会ったのです。そして彼にラーイオスの御者が叫びました。『他処者よ、御主君方に道を譲れ』と。彼が昂然と物も言わず進んでゆくと、若駒どもが蹄で彼の踏み出した足を血塗れにしました。それから — 不幸な出来事の他に何を話す必要がありましょうか — 子が父親を殺してその車を奪いそれを養父のポリュボスに与えました」(Ph.28-45)。この部分には「テーバイ物語の4」とそれほど変った点はない。ポリュボスの妃が王に自分の子供であると「説いた」のも世間に対してそういうことにしておこうと説得したのであろうし、それだからこそ成人したオイディプスが自分の生まれについて疑問を持つに至ったのだろう。むしろ、オイディプスが「父を殺し母と結婚する」という有名な神託を受けて驚き怖れ、ポーキスに帰らぬ決心をしたエピソードが省かれて、奪ったラーイオスの車を養父に与えたと記されていることが奇異に感じられる。この話は他の解説には見当たらないが、それはイオカステがこの余りにも忌わしい神託に言及するのを憚ったのと、スピックスの事件との間に時間の経過を置くためであろう。

ここでイオカステはスピックスの謎とオイディプスとの結婚について語る。「⑤、スピックスがこの都を略奪して苦しめ、夫もこの世に無い時に、私の兄弟のクレオンは私を妃として与えると布告しました。誰であれ、賢い乙女(スピックス)の謎を知る者に私を縁組させようと。するとたまたま私の息子のオイディプスが、スピックスの歌の意味を知って、そのためにこの地の王に据えられて、この国の王笏を褒賞として得ました。そ

してその惨めな子は、知らずに生みの母親と結婚し、その生みの母親も知らずに我が子と床を共にしていたのです」(Ph.45-54)。ここでは「テーバイ物語の5」の話が要点だけが語られているが、他の前書きなどに記されている有名なスピックスの謎の内容は省略されている。この謎解きの話は、オイディプスが母親と結婚することになった経緯の説明の為にのみ必要なものであり、それ故イオカステは「惨めな子が、知らずに、生みの母親と結婚し、生みの母親も、知らずに、我が子と結婚した」その点を繰り返して強調するのである。この点もこの劇が、イオカステの観点を中心に据えて構成されていることを示している。

次に彼女はオイディプスとその悲運について語る。「⑥、私は二人の男の子を自分の子に生まれました、エテオクレスと名高い勇士ポリュネイケースとを、そして二人の娘をも、一人はイスメーネーと父親が名付け、姉の方は私がアンティゴネーと名付けました。しかし私との婚姻の床が実は母親との結婚であったと知ったオイディプスはあらゆる苦しみを耐え忍んだ後で、我れと我が眼に恐るべき破壊を加えたのです。黄金造りの留め金で瞳を血塗れにして。」(Ph.55-62)ここでも「テーバイ物語の6」の有名な『オイディプス王』について、彼女は「我が子との間に子供を生んだこと」と「オイディプスが目を突いたこと」の二つのことしか語らない。テーバイの疫病、ラーイオス殺害の下手人探し、テイレシアースの警告などは彼女の視野に入ってくる来ないで、ただ自分と我が子たちのことだけが関心に上っているのである。この劇がイオカステの視点から描かれていることをこの箇所も示している。

六・二 新解釈の挿話

それに続いて彼女はその後のオイディプスの運命を語る。「α、私の子供たちの頬が髭で覆われるようになると、彼等は父親を門で閉じ込めて、運命が忘れ去られるようにしましたが、それには多くの詭計が必要でした。彼はまだ家の中に生きていますが、その運命で心を病み、不敬きわまる呪いを子供たちに呪っています、研ぎすました剣でこの家を分け合うようにと。」(Ph.63-68)カドモス王家の悲運は、「ハルモニアの首飾り」、「ペロプスの呪い」と「オイディプスの呪い」という形をとって子孫に伝えられていくが、イオカステが説き明かす王家の歴史の中で明確に語られるのはこの「オイディプスの呪い」だけである。オイディプスが二人の息子に怒って互いに剣で王位を争うように呪った原因には古来様々な説明がされているが⁽¹¹⁾、アポロドーロスでは「オイディプスは目を盲にした後、都から追放される彼を傍観するだけで助けようとしぬ息子たちを呪

ってテーバイから追い出されていった」と簡単に記されている。ソポクレースの『コロノスのオイディプース』もこの説を取り「彼らは父親の私がこのように不名誉に祖国から追い出されてもそれを止めようとも防ごうともしなかった、私在家から追い立てられて追放者と宣告されてもだ」(O.C.427-429)。と息子たちの冷淡な傍観者的態度だけで、彼の呪いを引き出す十分な理由になっている。

しかしイオカステはこれを一步進めて「息子たちがその不幸な運命が忘れられるようにと彼を閉じ込めた」と説明している。『七将』の前書きもこの説明に倣って多少の差異はあるもののほぼ同じように記している。「この息子たちはこの盲の人を小部屋に押し込めたので、彼は彼らが剣と戦いで王国を分け合うように呪った」(III Septem)。「だが彼の息子たち……はそのような穢れを忘却の彼方に追いやろうと望んで彼を小部屋に閉じ込めた。だが彼はそれを我慢せずに、王国を剣によって分け合うように彼らを呪った。」(IV Septem)「彼は子供たちによって侮蔑されて彼らが剣によって支配権を分ち合うよう呪った。」(V Septem) 特にこれは短かい前書きの中で大きい比重を持っている。「彼らはこの盲目の人を小部屋に閉じ込めて、以後の彼の運命を忘却に委ねようとしたので、彼は彼らが剣と戦いによって王国を分け合うようにと呪った。」(VI Septem)

以上煩瑣に過ぎはするが「オイディプースの呪い」の原因について、イオカステの説明と『七将』の前書きそれぞれの記述を列記した。『七将』の前書きは「フェニキアの女たち」を資料の一つに頼っているので内容が似ているのは当然である。しかし注目すべきことは『七将』も『女たち』もこのエピソードを「二人の兄弟が王位をめぐる争い合う原因」として「テーバイとアルゴスの戦い」の劇の前書き或いはプロローグの重要なテーマに用いていることである。そしてこの重要なエピソードが「テーバイ物語」の6と7に記されていないという事実は、それが本来のカドモス伝説には本質的な欠くことのできない話の要素として含まれてはいなかったことの結果である⁽¹²⁾。他の伝承では記されていなかったこのエピソードをエウリピデースが特にイオカステの口を通して語らせたのは、彼女が二人の息子の争いを止めさせようと説得する劇の構成のために必要だったからだろう。しかしこのエウリピデースの新解釈は、あたかも本来の「テーバイ物語」の重要な要素であるかのように後の時代の解説者には受け取られたのである。それではこのエピソードがどのように新たな悲劇へと展開して行くかを見よう。

エウリピデースの新解釈によると、「オイディプースの呪い」は二人の息子たちが彼の不幸を恥じて「それが忘れ去られるようにと彼を部屋に閉じ込めたこと」が原因となって、

怒り狂った父親が息子たちに与えたことになっている。彼らはその呪いの実現を恐れて、二人が一緒に同じ国に住まぬように王位を一年交代で譲り合う約束をしたが、結局それが次の悲劇を生むことになった。イオカステーはこう説明する。「⑦、二人はもし一緒に住むならば避けられぬ呪いを神々が実現させるのではないかと恐れ、取り決めを結びました。弟のポリュネイケースが先に自ら進んでこの国を去り、エテオクレスは留って王笏を持ち一年後に交替するというのを。しかし彼は支配の座に着くと王座を譲ろうとせず、ポリュネイケースを亡命者としてこの国から追放しました。」(Ph.69-76) ソポクレスにおいてはポリュネイケースの方が兄であるとされているが、ここでは弟とされている。そしていずれにおいても非はエテオクレスにあるとされている。アイスキュロスにおいてはこの点は『七将』だけからは明確ではないが、主役はエテオクレスであり、彼の主張に分があるように見える⁽¹⁸⁾。しかしエウリピデースにおいてはポリュネイケースの方に正義があり、エテオクレスも、コロスも、イオカステーもそれを認めている。『フェニキアの女たち』はこのエテオクレスの権力欲から生じた争いを解くためイオカステーが説得を試みるという筋書を取っており、その為に彼女の自害を二人の兄弟の相討の死の後に持って来るという点で「ターバイ物語」とは大いに異っている。しかし兄弟の仲違いから戦争に至るまでの筋書は他の伝承と同じであり、この部分は『七将』の他の前書きともほぼ似ている。「彼はアルゴスに行くと、アドラストスの婿となり、アルゴス人の大軍を集め率いて来ました。そしてこの七つの城門を持つ城壁までやって来て、父祖の王笏と国土の一部を要求しています」(Ph.78-80)。

さて「フェニキアの女たち」においては、憎しみ合う二人の兄弟を和解させようとするイオカステーの努力が一つの重要な部分を形成しているので、以上の前書きで長々と伝承の概略を述べた後で、その物語から第一エペイソディオンにつなぐ橋渡しとして彼女はこう述べる。「しかし私は争いを止められるために、兄弟同士が槍を交える前に休戦条約を結ぶよう説得しました。私が遣わした使者は彼自身がやって来ると言っております。おお大空の雲間に住まう輝けるゼウスよ、私共を救い給え、我が息子たちに和解を与え給え。もしあなたが賢明なら、同じ人間をいつまでも不幸なままに放っておくべきではありません」(Ph.81-87)。ここに「和解」と訳したことは「*symbainein* 歩み寄る、折り合う」という動詞から派生した「*symbasis* 合意、妥協」という意味を持っていて、一方的な譲歩ではなく相互の譲り合いを意味する。この同じことばを同じ作者が「救いを求める女たち」の中で「エテオクレスが和解を交渉して来た時に、その申出が程を得たものであったの

に、我々はそれを受け入れようとは望まず、その結果敗北してしまった」(739-741)とアルゴス王アドラストスに言わせている。同じ兄弟でありながら互いの権利を認めて歩み寄ろうとする協調心を失うようにと呪ったのが「オイディプースの呪い」の本質であろう。そしてこの一族の悲劇に始めから終わりまで関わるのが「ハルモニア(協調、調和)の首飾りと長衣」であるというのもまことに皮肉な取合せである。イオカステはこの「和解」を求めて説得を試みるが、その努力も空しく失敗し、彼女も二人の息子の後を追って自害するのである。

さてプロローグでイオカステが長々と述べた「テバイ物語」の要点をテイレシアースが簡潔に巧みにまとめている。「この国は昔から病んでいるのだ。クレオンよ、ラーイオスが神々に背いて子供を得て、母親にとって夫ともなる惨めなオイディプースを生んで以来、血まみれの潰された眼は、神々がギリシアへと企んだ見せしめなのだ。それをオイディプースの息子たちは時の中に隠し抜こうと望み、神々の眼を逃れようとして無知ゆえに誤ちをおかした。父親を敬わず外にも出さずに、不幸な男を狂い立たせた。彼は心が病んでその上侮辱されたために、彼らに恐ろしい呪いを吐きかけたのだ」(Ph.867-877)。カドモスの一族の災いは「ペロプスの呪い」と「オイディプースの呪い」の二つに大別できるが、その前者の結果としてラーイオスが「神意に背いて子を儲けた行為」が「誤ち、amplakema」(Ph.23)とされ、オイディプースの所業を恥じて息子たちが「忘却の闇に隠そうとした行為」もまた「誤ち、hamartia」(Ph.874)とされて、新たな呪いを招いていることにここで注目せねばならない。

七 「誤ち」と「罪」

筆者は以前に「プロメテウスのハマルティア」と題して「誤ちと罪」の概念について論じたことがある⁽¹⁴⁾。そこでは「ハマルティア、hamartia」には「的を外す、失敗する、誤つ、罪を犯す、hamartanein」という動詞から派生した「失敗、誤ち、罪」という意味があり、プロメテウスの行為を「誤ち」と見るか「罪」と見るかは、ゼウスとプロメテウスの対立の間のどの位置に身を置くかに関わると述べた。単なる「失敗、過誤」も絶対者としてのゼウスに敵対する行為ならば「罪」として断罪されるのである。そしてカドモス一族の「誤ち」についても同様の性質が認められる。ここでは主に前章で触れた「誤ち、amplakema」について考察してみよう。

「アムプラケーマ」も「amplakein、狙いを外す、失敗する、不足する、失う」という意

味から「誤ちを犯す、罪を犯す」という用法に転ずる動詞から派生して「誤ち、罪」という意味を持つ。「amplakia」という名詞も同じ意味に使われている。その用例を以下に挙げる。イスメーネーは「父オイディプースが自分で自分の誤ち amplakia を曝き自分の眼を潰し、母であり妻である人は縊死し、二人の兄弟は互いに殺し合った」(S.Ant.51)と嘆いてアンティゴネーの無謀を諷める。この場面も本題と同じ内容が凝縮して表現され、その際オイディプースの行為も amplakema と見なされていることが印象的である。

プロメテウスに関してもこれは hamartia と同義に使われている。彼はヘーパイストス達が彼を岩山に打ちつけて立去った後でやっと口を開き「自分は天上の火を盗んで人間に与えたが、そのような違背 amplakema の償いをしているのだ」(A.Pr.112)と言う。大地を蛇に追い立てられながらさ迷って来たイーオーもその姿を見て「何の咎 amplakia で滅びようとしているのですか」(A.Pr.564)と問う。彼にゼウスへの屈従を勧めるオーケアノスに対して彼は「そのような咎め amplakema (即ち、思慮深くせに愚かに見えるということ)はむしろ私の方だろう。(15)」(A.Pr.388)と答える。

そして神々に人間が背くことは明らかな「罪」である。カッサンドラーはアポローンに愛されて予言の力を授ったが、その後神に背いたために「それ以来、私とその罪を犯した amplakein ために、誰も私を信じなくなりました。」(A.Ag.1212)と言っている。また女神アテーナーはエウメニデースたちの重苦しい怒りに出会う者は、どこからその打撃が来るのか知らないが、「それは祖先の犯した罪 amplakema が、そういう災厄に人を導くのだ」(A.Eu.934)と説く。また愛する妻パイドラーを突然に失ったテーセウスは、「どこか遠い昔から、先祖の誰かの罪 amplakia の為に、神々の与える災いを身に受けるのだろうか」(E.Hipp.835)と嘆く。そのテーセウスは怒りにまかせて息子ヒッポリュトスを呪うが、コロスは「我が君よ、お願いです。その呪いを取消して下さい。誤ちを犯したこと amplakein がまた分るでしょうから」(E.Hipp.892)とたしなめる。

このように「アムプラケーマ」には「ハマルティアー」とほぼ意味を等しくして重なる部分が多いが、その「誤ち」が「神々に背く罪」となった時に「祖先の罪」として子孫に継承される可能性を秘めているものと考えられているところが興味深い。何故ならカドモスの一族の、本題の悲劇の発端は、「ペロプスの呪い」とデルポイの神託を知りながら、ラーイオスが「神々の意に背いて、酒に酔って子を儲けたこと」に尽きるからである。その罪だけでも子孫に及ぶ可能性があるのに、「神々がギリシアへの見せしめにしようとしたオイディプースを、息子たちが隠しおおそうと望み、神々の眼をごまかそうとして、新

たにオイディプスの呪いを招いた」ところにこの悲劇の反復の原因があるのであった。そしてその当のオイディプスの性格も、「あなたは私の激情を責めたが、あなたにもそれが備わっているのに気がつかずに、私を非難される。」(S., O.T.337-338)とテイレンシアースに描写されるほどに激しい。クレオンも彼の性格を非難する。「なぜならあなたは今も自分で自分に良からぬことをしているが、昔も友の心に背いて振舞い、激情に身を委ねたからだ、それがあなたをいつも破滅させるのだ。」(S., O.C. 853-855)そして息子のエテオクレスは彼が自己を罰した行為を、「父は自分に愚行を加えて盲目となした。」(E.Ph.763-764)とまで酷評している。ラーイオスから三代にわたって続く悲劇は、このような激しい性格を持った主人公たちが、自覚するとせざるとに関わらず、「神々の意に背いて」行動し「過失」に留まらず大きな「罪」を犯すところに特徴があると要約できるであろう。

まとめ

オイディプスの二人の息子、エテオクレスとポリュネイケースの兄弟相討つ争いを扱ったアイスキュロスの悲劇『テーバイに向う七将』を理解する手掛りとして、まずその作品に付けられた「前書き」を取り上げ、更に比較のために同じ題材を扱ったエウリピデースの『フェニキアの女たち』の「前書き」と「プロローグ」を検討してみた。その過程で分ったことは、G.Zuntz が分類したように、『七将』の「前書きの一」はアレキサンドリアの文献学者の記した作品解題の典型を示した簡潔な筋の説明と上演記録であり、「女たち」の「前書きの一」は劇の内容の概説であって性質を異にしてはいるが、両者共にその説明は劇の範囲からはみ出していないという共通点があった。それに対して『七将』の「前書きの二～六」と『女たち』の「プロローグ」は「テーバイ物語」のほぼ全般にわたって概説しているという点で際立った特徴を持っている。それらの各々についてR.Y.Hathornの記す「テーバイ物語」の各項と比較して得られた結論は、「前書きの二～六」は中世の文法学者が古典の神話の知識に乏しい中世の読者を対象にして書いた神話の背景の復習としての概説と考えられるのに反して、それら前書きの手本に用いられたと思われる文体の酷似した簡処を持つ『女たち』の「プロローグ」が、一見神話伝説の復習と見えて実はそうではなく、明確に作品構成の意図とテーマを打出しているということである。

「七将」の「前書きの二～六」が神話の背景を全般にわたって述べ、「ペロプスの呪い」にも「オイディプスの呪い」にも同じように触れているのに対して、「プロローグ」の

中心はオイディプスと「オイディプスの呪い」に置かれている。そして更に明確に「神々の意に背く行為」を「罪、過ち *amplakema* 或いは *hamartia*」であると言明することによってこの一族の陥った苦難の本質を明らかにしようとするのである。ラーイオスもオイディプスも神託の実現を避けようとして人智を以って神意に対抗し、自らの破滅を早めてしまった。「オイディプス王」において真実を追究して国家を災厄から救おうとするオイディプスの努力が、真相の一つ一つが頭わにされる毎に彼の破滅を用意するというアイロニーも、この線上で理解されるべきであろう。

彼の二人の息子たちも、神々が全ギリシャへの見せしめにしようとしたオイディプスを閉じ込めて忘却されることを図り「小賢しい知恵」*sophisma* (Ph.65)を以って「神意に背き」、怒り狂った父の「オイディプスの呪い」を受けることになった。この兄弟の争いも人間の局面だけに限定して考えるなら、歴史上の王家や武将の一族の間に数多く見られる肉親の相剋の一例に過ぎぬだろうが、人間の世界のあらゆる事象に神々の介入を読み取りまた悲劇が一族に継承されると考えるギリシア的敬虔の観点からは神々の意志の表われに他ならない。

アイスキュロスの『テーバイを攻める七人の將軍』はこの神の意志としての「オイディプスの呪い」が果たされることが主題となっている。エテオクレースは冷静さを忠告するコロスに対して「神が事を急がせられるのだから、ポイボスによって憎まれるラーイオスの一族は全て、コーキュトスの波を運命に従って追風を受けて下っていけ、Septem 689-691」という。しかしエウリピデースの『フェニキアの女たち』においては、他の伝承では先に縊死したはずのイオカステーを生き延びさせて、憎み合う二人の兄弟に「歩み寄り *symbasis*」による和解を求めて説得する役割を与えている。人智を超絶する神々の経倫を押し止めようとするかの如きイオカステーの試みは空しく潰え去るが、それでもエウリピデースはか弱い人間にはかない努力を諦めさせないであろう。「おお、天の雲間に住まう輝けるゼウスよ、私共をお救い下さい、息子たちを仲直り *symbasis* させて下さい。もしあなたが賢明なら、同じ人間がいつも不幸なままであることを許すべきではありません、Ph.84-87」とイオカステーが祈ってプロローグを締め括るように。

作品の概説としての「前書き」と作品の導入部としての「プロローグ」は形式と内容がいかに酷似していようとも、その意図と性質は自ら異なるものであり、イオカステーの語る「テーバイ物語」は、神話伝説の背景を復誦するものではなくて、詩人の創作上の思想と主題を表明したものであると結論して良いだろう。

註

- (1) 『テーバイ物語』と題される叙事詩にはコロポーンのアンティマコス (fl.c.400 B.C.) の作品に基いたプーブリウス・スタティウス(AD.45-96)のものがあるが、この論文ではカドモスの一族に関わる伝説群を総称してそのように呼ぶものとする。
- (2) 「前書き(作品梗概) hypothesis」と作品の内容の関連については、「『アガ멤ノン』の前書き」(エボス9号、1989)の中で論じた。
- (3) Zuntz, G.; *The Political Plays of Euripides* (Manchester Univ.Pr.;1955) pp.129-139;
Taplin, O.; *The Stagecraft of Aeschylus* (Oxford; 1977) pp.304-306,
Fraenkel, E. ; *Agamemnon*, (Oxford;1955) p.370
- (4) 「『テーバイに向かう七将』の技巧」(エボス第5号、1981)において、テーバイの七つの城門を巡る七組みの将兵たちの対比については既に記してある。
- (5) Zuntz G., op.cit.,pp.129-139.
- (6) ① I Sept., II Phil., II Med., II Alc.,
② Prom., Hecuba, III Sept. c.2785, p.2787
③ Euripidese の前書きの大部分。I Phoen..
- (7) "hepta epi Thebais" の (epi + Dative) は「—を守る、—を攻める」の両意に解釈できるが、この注釈者は前者の意味に受け取っている。普通は(epi Thebas) と対格にして「—を攻める」意味を表す。視点をアルゴス方に置くか、テーバイ方に置くかの相違によるものだろう。
- (8) エジプトの「テーバイ」への言及は hypothesis の逸脱の典型的な例とされる。
- (9) Zuntz, G.: p.132 "synopsis, periektike —"
- (10) Hathorn, R.Y.; *Greek Mythology*, (American Univ. of Beirut;1977),pp.281-294.
- (11) 「アリストパネスによる前書き」では、「イオカステを除いては —」アイスキュロスの『七将』と同じ物語であると言っている。
- (12) アポドーロス『神話』3.5.9,(Loeb 註参照)
- (13) 「テーバイに向かう七将の技巧」p.50 参照。
- (14) 「プロメーテウスのハマルティア」(エボス第四号、1980)
- (15) Rose の解釈に従う。